



非実在

~ Airmys ~

エアミステリ

探偵小説研究会

雨令

號



非実在 ~ Airmys ~
探偵小説研究会

エアミステリ



目次

『彼女が眼鏡を外すとき』

深川 拓

3

解決編

麻里邑圭人

9

座敷牢の中には

紫藤陽花

14

「告発」

方功鉄文

32

刹那

麻里邑圭人

44

風が吹いたら

二丁

49

エアミス研ってなんだ!!

タイガー田中

72

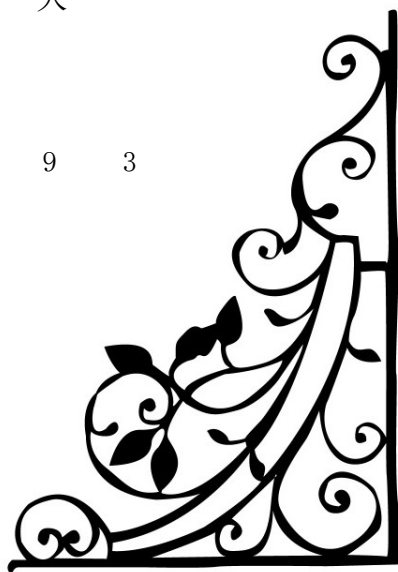
サクラサクミライ

麻里邑圭人

76

表紙イラスト

ウスダアヤ



『彼女が眼鏡を外すとき』

深川 拓ふかがわ たく

ドアを開けた途端にせきはるな関春奈と鉢合わせた。「わ」声と共に眼鏡が灰色の床に落ちる。引っ込めるより先に僕の足に当たって、少し弾いてしまった。

「——あ、ごめん」

「いいえ、大丈夫です」珍しい早口で遮ると、ワンピースの裾を勢いに膨らませて眼鏡に駆け寄り拾い上げる。無造作に鼻の上に戻すと「急いでのので、失礼します」肩口で二つに束ねた髪を振り乱して飛び出していった。紺のワンピースに真っ白いエプロンの、所謂メイド服姿で。

「……その格好で表に出るなよ……」

大いに手遅れだと自覚しつつ、一応後背に呼び掛けておいた。

改めて扉を潜る。完成したばかりのアトリエには絵画は当然のこと真っ白い画布も画架も絵の具さえも無く、ひたすら閑散としていた。設計段階で『偏屈な芸術家の隠棲するアトリエ』というイメージを打ち出したとかで、

幾分雑に固められたコンクリが剥き出しの床と壁、けれど高い位置に広く穿たれた窓から差し込む朱い陽射しと相俟って、何やら心身が引き締まるような心地がする。真ん中にデッキチェアを運び、傍らに鞆とビニール袋とを投げ出して座り込んだ。ほけーっと口を開け広げて、やっぱり何もない室内を眺める。——遙か彼方から、石焼きイモの呼び声が微かに聞こえてくるのが、なんだか雰囲気にながなくて素敵だった。長閑な気分になつて、僕は軽く躰を伸ばす。

色々な事情から急遽、屋敷の部分的な改装を余儀なくされて、それをジジイ——御子柴威志みこしばたいしに任せた結果がこのアトリエだった。同居のメイド二人にも僕の描いた絵を見せたことはなかったのだけど、うっかり漏らした一言を美羽——春奈とは別の同居人の方がよく記憶してジジイに密告したらしい。自分の才能をそこそこ客観的に理解している身としては、ありがた迷惑も甚だしかった——とは言え、こうして形になったものを目の当たりにするとやっぱり感慨に耽ってしまう。下手の横好きでも自分の創作の場を持つことは夢だったし、本心としては自分で稼いだ資金で手に入れたかったけれど、些細な述懐に形で応えてくれる人がいるというだけで、何とはな

しに嬉しいものだった——こと、長いこと僕はそう言うものに縁がなかったから。

開けっ放しにした扉から、昨日一日降り続けた雨でまだ湿気を含んだ裏庭の土壌の匂いが吹き込んできた。布の背凭れに深く軀を沈めながら、夏場はちよつと蒸し暑いかな、などと他人事のように考えていたら、扉の影からひよい、つとショートボブの女の子が顔を覗かせて、一瞬たまげる。

「あー、こんなところにいらつしやったんですか」スレNDERな四肢を光陰学園こういんがくえん謹製のセーラー服に包んだ樋橋美羽みうが、鞆を振り回すようにしてアトリエの中に踊り入った。「誰もいないから、捜しちゃいました」

「ああ、やつぱり春奈、出てるんだ」
きよとん、と大きな瞳を睜みはる。「春奈ちゃん、雅人様まさひとに何も言わないで出かけちゃったんですか？」

「制服のまま、ね」指で頭にカチューシャを添える仕草をしてみせると、すぐに得心して深々と頷いた。「ま、多分すぐに戻ってくると思うけど」

軀をくるくる回しながら、美羽は物珍しげに室内を観察する。短いスカートから健康的な太股がちらちらと覗いて、どうも視線が下げにくかった。

「雅人様、ここで絵は描かれないんですか？」人の苦衷くちゆうにはまるで頓着する様子なく、美羽は無邪気に訊ねる。

「折角、こんな素敵なアトリエになったのに」

「だから、僕の手には余るよ」

「そうかなあ」

首を傾げながら、僕の傍に歩み寄った。「——あ」不意に掌で口許を隠して、美羽は悪戯っぽく笑う。「なんか、いい匂いがします」

ばれた。僕はデッキキエアの横に置いたビニール袋を捧げる。「——ひとつ、食べる？」

「いいんですかあ？」

「太るかも知れないけど」

猫みたいに目を三日月にしてみせた。わざとらしく嘆息して、ビニール袋から新聞紙の包みを取り出す。新聞紙を剥いで、まだ熱を保ったアルミホイルを、さつさと差し出された美羽の掌に乗せた。

「わ、あ、あつつつ」意味を為さない嬌声を漏らしつつ、美羽は暫しホイルの包みをお手玉する。半分剥いて焼き芋の頭を出させたものを、破いた新聞紙で持てるように巻いて美羽に渡した。代わりに美羽がいまお手玉している芋を受け取って、こちらはアルミを剥いただけで無造

作に嚙ってみせる。

「——手、熱くないんですか？」

「コツと、慣れかな」

ふうん、と感心しながら美羽は芋の皮を剥いて頬張った。口許を掌で覆って、口の中で冷まし冷まし咀嚼している。——何とはなしに、気分が良かった。

「本当は、自分の分だけ買って帰り道にこっそり食べようと思ってたんだけど」高じて言わなくていいことまで口走ってしまう。「ズボンに入ってる小銭で間に合うと思ってたんだけど、昨日春奈に洗濯してもらったの、すっかり忘れててさ」

「雅人様、また」笑いかけて、美羽は眼を瞬く。「——

え？　じゃ、お金どうしたんですか？」

「五千円札で一本買うのは気が退けたんだよ」

へへっ、とちらつと歯を見せて笑った。「ご愁傷様です」

「そういう言い方はやめなさい」

時々手の中で転がしながら、熱い熱い言うくせに結構速いペースで平らげてしまう。片手にアルミホイルと新聞紙を別々に丸めながら、指先を舐めている美羽を見ていたら、ちよつと不憫になった。

「……もう一本あるけど、半分食う？」

「……わたし、そんな物欲しそうな顔してます？」

きっぱりと応える。「してる」

「……………頂戴します」

半分に割って、今度は大分冷めているのでそのまま美羽に手渡した。ありがとうございます、と態度だけは慇懃を装っているけれど、光が溢れんばかりに嬉しそうな顔をしている。

「女の子って、ほんとに甘いものには目がないのな」

「ほんはほほ」口の中に含んだまま喋ろうとして、思い直したように飲み込むと美羽は手を振った。「そんなことないですよー、わたしなんかより、春奈の方がすごいです」

「……そんなに？」

「なんかその訊き方、厭です」ちよつと唇を尖らせつつ、けれど頷く。「でもほんとですよ。他のものが目に入らない、っていうくらいですもん」言ってから、ふと思いついたように首を傾げた。「——そう言えば春奈、何処に行ったのかな」

「さあ。だいぶん急いでたみたいだけど。ここから出てくるとき、僕にぶつかって眼鏡落としたくらいだから」

「……眼鏡、落としたんですか？」

随分と訝しげな問い掛け。「ああ。そんな激しくぶつかった訳じゃないけど」

「それ、変ですよ？」

最後の一口を味わいつつ、僕は美羽の顔を見上げた。丸めたアルミホイルを掌に収めたまま、美羽は頬に指先を添えている。

「軽くぶつかっただけですよね？ だったら、眼鏡は落ちないと思います。眼鏡って、普通自分の顔のサイズに合わせて作りますから」美羽は両手をこめかみに運び、眼鏡を外す仕草を試みせる。「よっぽどすごいぶつかり方しないと、外れて落ちたりしないです。ずれたりはすると思いますが、多分鼻とかに引っかかる筈です。床にまで落ちたなら、きっともう外れかかったか、手に持っていたんだと思います」

「でも、確かに落つことしたんですけど」言ってから、ふと気付いた。「……あ、そう言えば、手が僕の胸に当たったんだ」

「かけ直しながらアトリエを出ていこうとして、その途中で雅人様にぶつかっちゃったんです、きっと」うんうん、と美羽は腕組みして頷く。

「……じゃ、こんなところで眼鏡を外して、春奈は何をしてたんだ？」

「目薬を注すとか、何か小さいものや近いものを見てた、とか」

僕は四囲を見回した。完成したてのアトリエにはよく言えば無駄なものが何もなく、悪く言えばただただ閑散としている。設えた棚には誰の差し金かお定まりの胸像が三つほど並んでいるけれど、春奈の背丈だと爪先立ちでなければ近付いて見ることは出来ない筈だった。

「雅人様が手掛けたものでもあれば、別だと思いますけど」とんでもないことをぬかすな。「今のところ、ここにわざわざ眼鏡を外して見るようなものはないと思います。ポケットに仕舞ってたメモ帳とかを読んだりするなら、もっと明るいところに行けばいいんだから、あと思いつくのは——」

すい、と美羽は人差し指を足許に向けた。そこにあるのは、コンクリ打ちっ放しの灰色の床だけ。

「それも、わざわざ眼鏡を外さないと見つけないものなんですから、きっと色も似ていたと思うんです」

灰色で、小さくて、必死に捜さなきゃ見つからないもの——咄嗟に思いつく、けれど、どうも春奈のキャラク

ターと一致しなかった。恐る恐る口にしてみる。「……小銭？」

「たぶん、五十円玉から五百円の間だと思うんです」頗るあつさり肯定されてしまった。「きつと、理由があつて早く小銭が欲しかったんだけど、他に心当たりがなかった——」

「待った、美羽、それは変だ」僕は掌でストップをかける。「ここは出来たばかりなんだよ？ 緊急に必要でも、どうしてこのアトリエで小銭を捜すんだ？」

「だって、昨日は雨が降ってましたから」

……ふと、片手にビニール袋を提げたばかりだったのを思い出した。丸めたアルミホイールと新聞紙を突っ込み、絞って小さくする。それだけ時間を稼いで漸く腑に落した。

「……ここで、僕のズボンを干したんだ」

「さつきも言いかけてましたけど」ブレスレットを軽く鳴らしながら、び、と指を突き立てる。「雅人様、あんまりズボンのポケットに小銭を入れない方がいいですよ」感づくことがあつた。「……着服してるか？ もしかして」

「とーにーかーく、ここまではいいですよね？」くるっ

と背を向けて、美羽は強引に話を逸らす。「で、あとは春奈ちゃんはどうしてそんなに急いで小銭を欲しがったのか、ですけど……」順調に推論を重ねていたのが不意に詰まったようで、振り返りながら不審げに顎を指先で撫でた。「単なる集金とかなら、春奈がそんな慌てるとは思えないしお釣りだって貰えるでしょうし……きつと、放っておいたらすぐに払えなくなるとか、買えなくなるようなことだったと思うんですけど……」

「集金とかじゃなくて、急いで小銭を用意する必要があつて……」腕を組み、僕も一緒になつて呻^{しん}吟する。「しかも、わざわざ落ちてるお金を捜そうとしたっていうのは」

「そんなに高価じゃなくて、きつとすぐに無くなるものだと思います」美羽は鼻の前にフリスビーを描くように指を回していた。その拳の中にまだ焼き芋の屑が握られている。先程絞ったビニール袋を広げて、美羽の方に口を広げて見せた。「すみませえん」言いながらゴミを入れようとした美羽と、僕は顔を見合わせる。期せずして唱和した。「——あ」

気配を感じて、これも二人同時に入口の方を見遣る。春奈が裏庭の取っ付きにぼんやりと佇んでいた。少し肩

で息をしていて、眼鏡の奥の瞳に気がない。心なしか、ワンピースもエプロンもカチューシャの髪までも草臥くたびれ萎れていた。

「……どしたの？ 春奈ちゃん」

「ううん、なんでもないよ？」首を振ったあとの笑顔が虚しい。

「……そう」

応えて、僕と美羽は視線を交わした。春奈の身に何が起きたのか、容易に想像がつく。故に、その虚ろさがそら恐ろしかった。

と、不意に春奈が眉根を寄せる。くんくん、と鼻を動かしてアトリエの空気に含まれた何かを探っていた——僕と美羽は、ただひたすら身を強張らせる。

春奈の瞳の焦点が、僕の上に定まった。後ろ手に組んで、つつつ、と滑るように歩み寄る。デッキキエアごと軀を退いて、危うく倒れそうになった。春奈は、僕がうつかり胸に抱え込んだビニール袋を見遣り、凝視する。

「……あ、あのね、春奈」

声を上擦った。メイド服姿の少女は視線を動かさない。「別にね、春奈を仲間外れにしようとか、そういう意図があった訳じゃ」

眼鏡の奥から上目遣いに僕を見て、首を傾げた。表情がない。背筋が凍て付く心地がした。僕の後ろに隠れるように身を寄せた美羽が、僕の肩をきつく掴む。

すい、と春奈は背を伸ばし、退いた。僕達二人を同時に視界に収める距離を取ると、不意に満面の笑みを浮かべる——全く笑いのない瞳で。

「雅人様、美羽ちゃん」陽気で、凡そ屈託およのなさそうな問い掛けだった。

「お腹、空いてらっしゃいませんか？」

——あとは、推して知るべし。

へ了

解決編

まりむらけいと
麻里邑圭人

犯人と探偵。それはいつの時代も決して相容れぬ水と油のようなものだ。

犯人は探偵の追及から逃れるためにありとあらゆる策を弄し、探偵は犯人を捕まえるために犯人が弄した策を一つずつ潰していく。

そのいたちごっこの結末は、いつだって二つのうちのどちらかしかない。

数少ない迷宮入りの事件として探偵に最大限の屈辱を与えるか、あるいは数ある茶番の一つとして探偵の輝かしい経歴に加わるか。

もっとも、私としては前者で終わってくれた方が嬉しいのだけれど……。

（まあ、それはこの探偵君次第かな）

私は心の中でそう呟くと、目の前の青年の顔をしげしげと見つめた。

きりりとした精悍な顔立ちの中にまだ若干の幼さを残す彼は現在、初めての授業参観で発表する子供のように慣れない推理を懸命に披露してくれている。

そのひたむきとも言える姿は、つい自分の立場を忘れて応援したくなってしまうほどだ。

（いかんいかん。少しは犯人としての自覚を持たなくては……）

私は苦笑すると、再び青年の方に意識を集中させた。

「……以上のような理由からこの一連の事件の犯人は黒崎^{さき}さん、あなただということになります」

そして今——ようやく長かった彼の推理が終わった。

広々とした洋間には現在、私と彼以外の人間は誰もいない。

私は目を細めると、彼の推理を頭の中で反芻した。

成る程……なかなか、よく考えられている。

私はにっこり微笑むと、古今東西の犯人役がそうしてきたように取りあえずの感想を述べた。

「全くよくできたお話ですね。その想像力には感服しますよ」

「……ということは、まだ罪を認めるつもりはないのですね」

「認めるも何も、実際やっていないのですから仕方ありません」

青年の目に、鋭い光が宿る。

「……僕の推理に、どこか穴でもありましたか？」

「いえ、確かに筋は通っていますよ。でも、それだけではまだ不十分ですね」

「不十分？」

「ええ、そうです」

私は頷いて「論より証拠という言葉があるのをご存知ですか？ 証拠がない限り、それはあくまで机上の空論に過ぎないですよ」

「なるほど」

青年はそれを聞くと、納得したように目を閉じた。

溜め息混じりに言葉を吐き出す。

「確かに……その通りですね」

「分かっていただけでしたか」

「ええ」

青年は目を開けると、毅然とした表情で私の顔を見つめて言った。

「では……仕方ありませんね。あなたが望むというのであれば、お見せしましょう。僕の想像を現実に変える、決定的な証拠をね」

「決定的な……証拠ですって？」

青年の言葉は、少なからず私に衝撃を与えた。

どうやら私はこの青年のことをいささか甘く見ていたようだ。

青年は言う。

「黒崎さん、あなたの今までの犯行は犯罪者のお手本とも言うべき完璧なものでした。あと少しで完全犯罪も夢ではなかったでしょうね。しかし……最後の最後であなたは致命的とも言えるミスを犯しました」

「ミス？」

「そうです」

青年は頷いて「第三の事件の時あなたはエミコ夫人から手痛い反撃を受けましたね？」

「……何のことです？」

「とぼけないで下さい、黒崎さん。エミコ夫人の左手の甲にはうつすらと痣が残っていました。それが何よりの証拠です」

「ちよ、ちよっと待って下さい。あなたの話はめちゃくちゃだ。何故、その痣が証拠になるのです？ だって、それは夫人が犯人に殴られた時に付いたものでしょう？」

「ええ。僕も最初はそう思っていました。しかし、実際

はその逆だったのです」

「逆？」

「つまりあの痣は、エミコ夫人が犯人——要はあなたのことなのだけれど——に殴られて付いたものではなく、逆に犯人を殴ったことにより付いたものだったのです。

恐らく抵抗しているうちに思わず——といったところでしょうね」

「ほう……」

私は素直に感心した。

（既にそこまで分かっているとは……）

だが、一応の反撃を試みる。

「では、百歩譲ってあなたの言う通りだったとしましょう。しかし、それならば私の体にも打撲の痕が残っているはずではありませんか？ うっすらとは言え痣が残るくらいです。とてもただで済んだとは考えられません。ですが……昨夜、サウナで一緒に過ごしたあなたなら結果はもうご存知ですよね？」

「そうですね。確かにあの時、あなたの体にはそんな痕跡などどこにもなかった」

「だったら——」

「ですが……それが、目につかない場所にあるとすれば

どうですか？」

「！」

「もっと具体的に言えば、そこを殴られたことにより体の内部の方に傷が残ってしまった……違いますか？」

「……」

「鼻、ですね」

私が黙っていると、青年は断定するような口調で言った。

「抵抗するエミコ夫人に鼻を殴られて、あなたはあろうことかその場に鼻血を垂らしてしまった。あなたは上手く証拠を消したつもりだったのでしょうか、机の脚に微量ながら血痕が残っていましたよ。血液鑑定にかければ誰のものかすぐにはつきりするでしょうね」

「……」

私は、何も言わなかった。

私の反撃は、ものの見事に返されてしまった。

チェスで言えばチェックメイト、将棋で言えば詰んでいる状態である。

「もう言い逃れはできませんよ、黒崎さん」

青年はそう言うと、口元にニヤリと笑みを浮かべた。

——会心の笑み。探偵が絶対の勝利を確信した時に見

せる、典型的な態度の一つである。

おおかた内心では、私に反論などできるわけがないと高をくくっていることだろう。

でも。

(……果たしてそう、うまくいくかな?)

私は一つ溜め息をつく、ゆっくりと口を開いた。

「……本当に」

「え？」

「本当にあなたはそう思いますか？」

「……それは一体どういう意味ですか？」

何を言ってるか分からないというように、青年は形の
良い眉をひそめる。

私は更に続けて

「言葉通りの意味ですよ。あなたは本気で私が言い逃れ
できないと思っているのですか？ だとしたら、とんだ
おめでたい人だと言わざるを得ませんね。何故なら……
あなたは私を追い詰めたようにいて、その実ちつとも追
い詰めてなんかいないのですから」

「で、でも、あなたには決定的な証拠が——」

私は、哀れむように青年を見た。

「……どうやら、あなたはまだ気付いていないようです

ね」

「な、何を」

「証拠よりも重大なある事実が存在することを、あなた
は見落としています」

「証拠よりも重大なものですって？ そんなもの、ある
わけが——」

「いいえ、あるのです。そしてそれは、作中の人物であ
る私やあなたなら気付いてしかるべきことなのです」

「作中の人物なら気付いてしかるべきこと……？」

そして、次の瞬間——青年はあつと声を上げると、そ
のまま凍り付いたように立ち竦む。

「ま、まさか……」

「そのまさか、ですよ」

私は頷いて「そうです。この小説には欠けているので
すよ——事件部分の描写という一番肝心な部分がね」

*

果然とする青年を横目に、私は言う。

「……今更説明するまでもありませんが、推理小説とは
読者と作中人物が互いに情報を共有することによって成

り立つジャンルです。従って探偵が示す解決はいつだって読者が納得するような理に適ったものでなくてはなりません」

青年は動かない。私は続けて

「しかし、この小説では犯人を立証する上で要とも言えるはずの事件部分の描写が欠如しているので、いくら解決が示されたところで読者が納得するはずがありません。本格ミステリにおいては読者が納得しなければ、それは真相と成り得ないですよ」

「……だったら、作者に言ってその部分を追加してもらえば……」

「無駄ですね」

私は、青年の最後の悪あがきをにべもなく切り捨てる。
「あなたには残念ですが、作者にそんな気はさらさらありませんよ」

「ど、どうしてそんなきつぱりと言い切れるのです？」

「だって……」

私は当惑する青年に向かって、ニヤリと笑い返してみせる。

「この小説のタイトルからして、それが如実に表れているではありませんか——『解決編』しか書く気がない、

座敷牢の中には

紫藤陽花
しどうはるか

*

小さな窓枠の内に、上弦の月が煌々と輝いている。
それを床の上でぼうつと見上げていた。月は美しいと
思える、数少ないものであった。

今夜は朱次郎^{あかじろう}も弓彦^{ゆみひこ}も、半月に一回にある村の会合で
留守だった。一階の寢室には、弓彦の妻である百合子^{ゆりこ}し
かいなかった。

おそらく先程の声は、誰にも届いていなかっただろう。
着物を着直しながら、彼が出て行つた扉の方を見遣る。
暗くて何も見えなかった。しかし、この部屋には自分以
外の誰もいないということは知っている。

ふと部屋の隅に目をやると、小さな窓からの月明かり
が、何か長いものを照らしていた。だるい身体を持ち上
げそれを手に取る。どうやら彼の忘れ物のようだった。
なるほどと思い、それを引き出しの中へ入れた。

*

白銀の化粧をほどこされた山並みを望む村。寒村とま
では言わないでも、豊かではない山村。

お屋敷の塀に沿った道を、散歩だろうか犬を連れたふ
たりの少年が歩いている。帽子を被った少年と、頭をボ
ウズ頭に丸めた背の高い少年。ふたりと一匹は、朝の切
り裂くような寒さに、真白い息を揺らしていた。

「おいクロ！ あんまり急ぐなよ！」

背の高い方の少年が言う。クロと呼ばれた犬は主人の
方を振り返り、悲しげにクウンと鳴いた。

彼らはお屋敷の正門とは真反対にあたる道を歩いてい
る。まだ空は薄暗く、少し離れた山間から朝日の気配が
した。そういえばこのお屋敷は『乾^{いぬい}の玄関』なのと言
っていた。乾は方角にして北西。その真反対であるここ
ら側から朝日が顔を出すのは道理であった。

「おい、あれ……」帽子を被った少年が立ち止まり、お
屋敷を指差す。「件^{くだん}の……」

背の高いボウズ頭の少年は彼が指さした方を見遣り、
そして首を傾げた。彼には何も見えなかったのだろう。

クロは立ち止まり、ふたりに小さな目を向けている。

「……お前知らないのか、化物の噂」

帽子の少年が得意げに言う。意地を張っているのだろうか、ボウズ頭の少年が強めに返す。

「噂って、下駄屋のとの幽霊屋敷か」

「違ごう違ごう、ここだよ」帽子の少年は首を横に振る。

「本物の化け物屋敷だよ」

「きみたち！」

突然割り込んできた声に、少年ふたりはビクリとした。その声の主は、彼らの進行とは反対の方から現れた。クロが勢い良く吠える。

外套を羽織った青年だった。一見、どこにでもいるような、特に珍しくない風采ではある。

しかし、その頭の白髪がそれを否定していた。

白髪の青年は吠えるクロを無視し、

「きみたち、ここらへんの子かい？」

少年たちにそう問いかける。

「そ、そうだけど……」

ボウズ頭の少年がビクビクしながら答えた。

少年はおそらく、先程の会話が聞かれていて、それで怒られるのではないかと思っているのだろう。青年はそ

れに気づいてか、

「アアッ、ごめんごめん。別にお兄さんは怒っているわけじゃないんだ」青年はフルフルと首を横に振る。白い髪が揺れる。「ただ……その話、ちよつと話を訊かせてほしいなと思ってね」

怒っていないという言葉聞いたからか、少年たちは見て判るほどにホッとしていた。それでもまだ、警戒心自体は解けてないようだった。

「きみたちはさっき、このお屋敷の話をしていたよね」

青年の問いに、帽子の少年が答える。

「……この屋敷に、ひとを喰った化物が、閉じ込められてるって……しんたにい慎太兄が」

相変わらずクロが吠え続けている。

「ナルホド。その慎太兄は、それだけしか言ってなかった？ 例えばそうだね」青年は一瞬考えて続ける。「性別だとか、何をしたのかだとか」

「たしか……人の心を読んだり、未来が見えるって。あと、赤い——の鬼だって、言ってた」

帽子の少年は何かに怯えるように、慎太兄から訊いたという情報を伝えたが、クロの叫びが大切なところに被ってしまった。しかし青年には聞こえたらしく、小さな

声で「鬼というより件か」と呟いた。なにか剣呑なものを感じ取ったのだろうか、またもふたりの少年はビクリと肩を動かした。

「アッ、ごめん。なんでもないよ」

青年は少年のボウズ頭を撫で、そして続ける。

「……できればなんだけど、その慎太って子からも直接話をききたいな」

青年は笑顔で言った。サッと白い風が吹いた。青年の髪が揺れる。

「エッ、清水屋のとその長男で、小学六年生なんだけど。清水屋の場所は……あの角こと曲がって、……」

ボウズ頭の少年の言葉ひとつひとつに頷く青年。

「ありがとう。そうだ、きみたちにはこれをあげよう」

白髪の青年はどこからか、飴玉をいくつか取り出した。それを見て、肯定ではなくその逆の意味でふたりの少年の表情が変わった。

「アノ……、知らんねおじさんに……ものこともらっちゃいけないって、母ちゃんに……」

シドロモドロに言う背の高いボウズ頭の少年に、僕はまだ二十歳なのだけなどと、小さくぼやく白髪の青年。

「兎に角、ありがとう。大丈夫だよ、この飴には変なもの

のなんか入っていないから……でも、母ちゃんたちには内緒にしたほうがいいかもだけどね」

そう笑いながら青年は、ふたりの少年の小さな手にむりやり飴玉を握りこませる。

「……おじさんって、誰なの？」

帽子を被った方の少年が、飴玉を見つめながら質問をした。訝しんでいるのだろう。

「誰かと言われると困るけれど、そうだなア……うん」
青年は大きく頷いて、言った。

「探偵さ」

「タンティーサ？」ボウズ頭の少年が不安気に首を傾げる。「タンティーサさん？ 外国の人なの……」

「エッ、イヤッ……。探偵は名前じゃなくてだね……名前シドウハルカっていうんだけど……」

最近の子どもは乱歩も読まないのかな、と探偵を名乗る青年は右手で頭をかきながら言う。クロは吠えるのに疲れたのだろうか、その場で寝そべっている。

「おじさん、何こと言ってるの」

「……確かなのは、おじさんではないことくらいかな」

陽が昇り、ふたりの少年とクロが去ったあとも、白髪の青年はその場に立っていた。その手にはクシヤクシヤになった紙片——手紙が握られている。

「やはりここだったのか、『茜ヶ崎^{あかねがさき}』」

彼はお屋敷を見上げ、

「……サアテ、どうしようかな」

そうつぶやき、右手を上げた。

*『客間』

「それが、ぼくがここに来た理由です」

自分は探偵だ、そう名乗った男が言った。彼は女中の制止を無視し、半ば脅迫めいた方法でお屋敷の客間に入ってきたのだった。

「つまり……」

茜ヶ崎弓彦が気の弱そうな声で言う。婿養子の彼は、朱次郎の前ではいつもビクビクして話す。弓彦が続ける。「この屋敷の中に誰かが監禁されていると、君……探偵さんは言いたいわけだね」

探偵は先ほど自分の名前を名乗ったが、覚えられてい

ないらしい。

「エエ」

弓彦の問いに、探偵は頷くように言った。

「具体的には、件という人の心を読む——」

その言葉で、場を沈黙が支配した。探偵自ら破る。

「……そういうわけで、この屋敷の中を調べさせていただけませんか——」

——沈黙が引き継がれる客間。

誰ひとり、声どころか音も発しなかった。どれほどの時間が経ったのだろう。五分ではきかない時間上の空白。それを崩したのは、今度は探偵でなかった。

「駄目だ」

茜ヶ崎朱次郎。百合子の実父であり、医師の家系である『茜ヶ崎家』——このお屋敷の現当主。

彼の重く厳かな声が、沈黙を叩き殺したのだった。

「駄目だ」

彼は念を押すように繰り返し、言う。

「探偵と言ったな。貴様の言うことにはなんら根拠がない。件だと、馬鹿馬鹿しい。そんな化物じみたものが、この屋敷にいるわけがなかろう。そもそものだ。そのような突拍子も無い依頼、誰からあったというのだ」

探偵は少し黙って、

「それは黙秘させていただきます。それでも僕は探偵の端くれ。守秘義務があります」

「ならば交渉の余地もないな」朱次郎はゴホンと咳払いをする。「この屋敷から出ていつてもらおうか」

「……そうですね」

そう言つて探偵は、わざとらしい大きい溜め息を吐く。

「まあ、当たり前ですね。仕方ありません。……黙って忍び込めば泥棒と同じですし」

ギイイと、扉の開く音がした。

最後に、扉へ探偵が一言。

「それでは皆さん——ごきげんよう」

ボタンと、扉の閉まる音がした。

*『夫妻の寝室』

「昼に来たあいつは、探偵と言つたな……」

夜は更け、茜ヶ崎弓彦とその妻である百合子の寝室。

彼の言葉に、百合子は聞こえるか聞こえないかの大ききさで一言、はいと答えた。

弓彦は昼間が嘘のような態度であつた。彼はこの寝室

でだけ——妻である彼女に対してだけ、気が大きくなるのだった。

「探偵が出てきた……それに奴は依頼人と言つていたな。ということは、例の噂が村の外部に漏れている、そう考えるべきだろうな」

「……そうですね」

静かな夜に、百合子の着崩れの音。

「あんな探偵風情に見つかるわけがないだろうが……仮に見つかつても、あの小平太もいることだし近づけまい。奴は馬鹿だが、腕っ節だけは利く」

ええ、と百合子は鈴のような小さな声で言う。

「だが……あの子もそろそろ、隠し通せる歳ではないか……」カチリと、電気スタンドのスイッチ。「なんとかせねばならん……」

「……なんとかせねば、とはどういう意味かしら」

百合子が訊くと、彼は黙つた。彼女の声には、小さながらに怒気が感じ取れた。

……この声が好きだった——愛していた。

ややして、弓彦はゆっくりと言つた。

「方法など、たった一つしか……」

そのとき近くで扉の鍵が開く音がした。引き出しを閉め、サツと身を正す。扉の方を見遣ると、細い光が部屋の闇に切れ目を入れたところだった。

扉が開き、大柄で猫背な影がノソノソと部屋に入ってきた。逆光で顔は見えないが、誰だかはすぐにわかる。

「……おやすみでしたか」

小平太だった。彼はこの部屋の向いに住み込みで働いている。まるで門番のように、部屋を守っている。

彼は入ってくるなり、キョロキョロと部屋を見回す。

「なにをしに来たのかしら……小平太」

そう訊くと、彼は困ったように頭をかいた。いやに落ち着きがない。

「イエ、おれの用心棒がどっかいっちまってすね」

用心棒とは小平太がいつも腰に付けている棍棒のこと

だ。今はその棍棒はぶら下がっていいない。そのことが、暗がりの中でもわかった。

「……何度も言うようだけど、この部屋の中にはないわ。

さあ、今夜はもう寝るのだから、出ていって頂戴」

小平太はひと通り部屋を見まわし、首を傾げながら部屋から出て行った。フウとため息を吐く。

また、嘘をついた。

*『裏玄関』

朝だというのに、彼らは騒々しく現れた。

正門からでは決まりが悪いと配慮したのだろう、彼らは裏玄関からこのお屋敷を訪ねてきた。この前、少年ふたりと青年が話をしていたところに、このお屋敷の裏玄関がある。そこにふたりの男が入っていった。

「奥様、警察の方が！」

このお屋敷の女中である早苗さなえが甲高い声を出す。刑事は事情を説明する。

「……そのようなわけなので、我々はこのご主人と」
刑事らしい男が言い切る前に、百合子の声が遮った。

「ここではなんですから。お入りください」

その声は、この村の冬の寒さのように澄んでいった。

「イエツ、我々は」

今度は別の男が言う。こちらも刑事だろう。ハキハキとした話し方から若さが感じ取れた。

しかし百合子はただ一言、

「父は客間で話を聞く、と申しております」

そう言い「どうぞ」と締めた。

＊『客間』

「ナニツ、あの探偵が死んだだと！」

朱次郎の声が響く。昨日、例の探偵が通された客間だった。今日の来客が彼の計報を知らせる刑事のふたり組だとは皮肉な話だ。

「それは本当なのか」

朱次郎の問いに、刑事が答える。

「エエ。今朝、彼の泊まっていた宿で死んでいるのを、宿の女将が見つけました」

朱次郎はフンと鼻を鳴らす。

「良い気味だ。罰があたったのだ」

「……罰があたった、とは」

刑事が訊くと、弓彦が小さな声で、

「……昨日、彼がここに来たんです」

刑事は頷く。

「それはいくつかの証言が取れています」

「その時の話が——」

弓彦はゆつくりと昨日の客間での会話を説明した。

ナルホド、と刑事が納得したように言う。

「つまりこの屋敷の中に誰かが閉じ込められている。それを誰かの依頼で探しに来たと」

「馬鹿馬鹿しい」

朱次郎が小馬鹿にしたように鼻で笑って言う。

「この屋敷には、いまここににいる者で全員だ」

「エエツト……」

若い刑事の声がようやく聞こえる。

「ご主人である茜ヶ崎朱次郎さん、そのご息女である百合子さん。その旦那様の弓彦さんに——」

「通いの早苗と、奥に小間使いの小平太が控えています」

彼の言葉に、百合子が付け足す。

「オット、小平太がいたな……」

朱次郎が思い出したように言った。

「それで全員ですか」

そうだ、と朱次郎が肯定する。

「わかりました。ところで先ほど、罰があたったと言われましたが……」

刑事は少しためて言った。

「……その探偵は殺されたのですよ」

ふたりの刑事からもたらされた話をまとめよう。

昨日の昼にこのお屋敷の客間を出た探偵は、辺りをふらついているのを村人に目撃されている。決して広くない田舎だ、知らない顔があると目立つ。殺害された探偵も例に漏れず、村人の記憶に残っていた。

探偵は夕方ごろ、彼の予約した清水屋という宿——宿と言ってもそう立派なものではない——に戻ったという。これは死体の第一発見者でもある宿の女将の証言だった。翌日、朝食を頼まれていた女将が探偵の部屋を覗くと、彼は変わり果てた姿で布団の上で転がっていた。部屋が荒らされた様子はなかったため、物取りの犯行とは考えづらい。

田舎の小さな宿だ。強固な戸締りと言えるようなものもなく、誰でも出入りできる環境だった。

そこは、密室でもなんでもなかった。

*

小さな窓枠の内に、満月が煌々と輝いている。

弓彦と朱次郎は村の集会に出かけたため、寝室には百合子がひとりだった。

……ガチャリ、と扉の鍵が開く音がする。

見なくても誰だかわかる。その巨体をオドオドと縮こませて、小平太が部屋の中に入ってきた。

「アノツ……」

小平太が何かを言いたそうにしている。いつもとは態度が全く違った。その顔には脂汗も浮かんでいる。

「……何をしにきたのかしら、小平太」

そうは言ったものの、彼の言いたいことは予想が出来ていた。あの用心棒のことだろう。

「あの用心棒なら、ここにはなくてよ」

そう言って部屋の片隅を指さす。そこは彼がいつも服を脱いで置いておく場所だった。

「ウウツ……」

小平太は泣きそうな声を出した。それを見て、もう少しいじめてやろうと思った。

「……あの探偵は、何か硬い棒状のもので殴られたようね。何度も何度も。顔が判別つかなくなるほどに」

昼間の刑事の声を思い出す。

小平太はその脂ぎった顔を真つ青にしながら、頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。

いい気味だった。

この村で一番の力の持ち主である小平太であったが、彼は頭が弱かった。

そして、あまりにも自分の欲望に忠実すぎたのだ。

「さあ、早く出て行って頂戴」

その言葉を聞いて、彼はそそくさと出て行く。慌てていたとはいえ、扉に鍵を掛けるのは忘れていなかった。

……小平太が普段夜見せる醜惡な姿と、傷だらけの背中を思い出して身震いをした。だが、それももう少しの辛抱だ。

もう少しで、彼が助けに来てくれるはずだ。

*

翌朝、小平太が刑事たちに連れて行かれた。

凶器となった棍棒が畑の中で見つかったという。そして怪しい人影がこのお屋敷の方へ向かうのを見た、事

件があった日の宿の客が証言した。

刑事がふたたび話を訊きに来た。

朱次郎は突っぱねたが、凶器である棍棒を見せられた途端に顔の色が変わっただろう。朱次郎にはその棍棒に見覚えがあるはずだった。

お屋敷の裏の通りを、猫背の小平太が刑事と共に歩いている。

わたしはそれを、お屋敷の二階にあるこの部屋の、小さな窓から見下ろしていた。

昨日刑事たちが言っていたように、このお屋敷の客間に通された探偵を死に淵に追い立てた凶器である『何か硬い棒状のもの』は——もちろん、小平太愛用の用心棒、例の棍棒そのものである。

あの探偵は、小平太の棍棒で撲殺された。小平太はこの部屋に何度か用心棒を探しに来たが、その時にはもうこの部屋にそれはなかったのだった。

わたしはお屋敷内の状況を知るために、部屋に備え付けられていた引き出しを開ける。中には小物が入ってい

たが、それに用はない。

わたしは更にそれを引っ張り、家具から外す。

その時だった。

この部屋の扉の外で、何かを打ち付けるような音が聞こえた。ガンガンと、鍵を壊すような音だ。

ややして音がおさまったと思うと、ガチャリと扉が開く。今までその扉を開けるのは、小平太しかいなかったのに――

「ヤア、久しぶり――」

現れたのは、外套を羽織った青年だった。

「――助けに来たよ」

――あの殺された探偵がお屋敷を訪れる一週間前にこの部屋の窓から見かけた、もうひとりの探偵。

*

するりと部屋に入ってきた白髪の青年は、その華奢な右手に小ぶりの斧を持っていた。わたしがいる座敷牢が

あるこの部屋の扉の鍵を、それで打ち壊したのだろう。

ゆつくりとこちらへ向かってくる彼に、わたしは先ほど小平太を見送った小さな窓を指差して言う。

「前に、このお屋敷の裏の通りにいたわよね。少年たちと話していた」

「ウン。きみとも、ようやく話せたね」

「シドウハルカと、言ってたわね」

わたしは一週間前のことを思い出す。この部屋の細く小さな窓から見えた、探偵を名乗る彼と少年たちのこと。

「どういう漢字を書くの？」

「紫陽花の中に藤棚の藤……って言ってわかるかな」

「いい名前ね」

わたしは小さく頷く。そうしているうちに、彼はこの座敷牢の格子の前に立った。

青年とわたしの間――そして、部屋の中を二つに区切る格子。木組みの格子で区切られた……まるで見世物小屋のような異様な空間。その奥に、わたしはいた。

十二年間、ずっとだ。

「いま出してあげるから」

そう言い、彼はこの座敷牢の封印を解こうとする。

青年は右手に持っていた斧で格子の扉に掛かった南京

錠を打った。何度目かの鈍い音の後に、カランと南京錠が床に落ちた。南京錠自体の形は保たれている。その周りの金具を破壊しようだった。

白髪青年はこれでよし、と呟き座敷牢の扉に手をかける。キイイと嫌な音を立てて扉が開く。彼は身をかため、ノソノソと中に入ってきた。

青年は座敷牢の中を見回し、何かを見つけたのか部屋の一方へ向かっていく。そこには、部屋に備え付けられた引き出し家具があった。先ほどわたしが引き出しの一つを外した、そのままの状態になっていた。

「これかな」

「……ええ、そうよ」

彼は引き出しを外さればかりと口の開いた家具の、その中を覗き込む。奥には闇が伸びていた。そこから何か、うなり声の様な音が聞こえている。

「これで屋敷中の音を聴いていたんだね」

わたしは素直に頷いた。

この引き出しを使ってわたしは、あの殺された探偵が訪れた客間の音も、弓彦と百合子の寝室の音も、刑事の訪れた朝の裏玄関の音も聴いていたのだった。

このカラクリは七年ほど前に見つけた。中が筒のよう

になっており、お屋敷中に張り巡らされているのだろうと考えている。

わたしはこのカラクリを使って、お屋敷のことを知ることができた。しかしそれは、あくまで音が出ることで、故に情景は想像するしかなかった。

……本来ならば隠しておくべきことであつた。最近も百合子の寝室の音を聴いているときに、小平太が用心棒を探しに現れて肝を冷やした。だがそれもこの座敷牢の中に閉じ込められているうちの話だ。

これは余談だが、おそらく朱次郎はこの存在を知っている。なぜならこの引き出しで、彼の個室の音を聴き取れることは出来ないからだ。どうやら通じていないらしい。朱次郎がどういう意図の元でこのカラクリをそのままにしているのかはわからない。

「ナルホド……これが件の正体か。ここから屋敷中の話を聴く。だからここに閉じ込められた者は、閉じ込められているのにこの屋敷の内部のことを知ることが出来る怪異となる——もしかしたら、昔は占いやなんかに使っていたのかもしれないけど……。アッ、そうか。件だから座敷牢に押し込められているのではなく、座敷牢に押し込められているから件になる。カラクリ自体はツ

マラナイけれど、この構図は面白い……」

青年はひとり納得していた。

「アアッ、イヤ。ごめんね。君のことをオモシロがったわけではないよ」

わたしの視線に気づくと、彼は両手を振る。

そんなことよりもわたしは、彼に確かめなければなら
ないことがあった。わたしは静かに尋ねる。

「ねえ、訊きたいことがあるのだけど、いいかしら」

「……………」

彼はわたしの質問を笑顔で無視すると、座敷牢の中を
うろつきだす。なにをしているのだろうと思っていると、
部屋の隅に置いた小さな本棚に近づいていった。

「黒岩涙香に……これは乱歩の『孤島の鬼』かな。アハ
ハ、いい趣味だね」

「……小平太に貰ったの。お返しとして」

わたしの言葉に、青年は首を傾げる。

「お返し？」

「ええ、口止め料、とも言うわ」

少し考え、なるほどねと青年が言う。どうやら理解し
てもらえたようだ。

「ここに閉じ込められているわたしの声は、どんな事を

されても……どうせ誰にも、どこにも届かないというの
に。そのために小平太がこの部屋の前に詰めていたのに。
本当に馬鹿な小平太」

「……でも、いまは僕に届いている」

彼は振り返り、座敷牢の唯一の窓を指す。

「あの窓から君が棍棒と手紙を投げてくれたから、僕は
ここに來ることができた。きみを助けることができた」

そんな簡単な話だった。

わたしはこの部屋の小さな窓——外界と唯一繋がった
窓から、彼に宛てた手紙を渡したのだ。

お屋敷の裏の通りで、わたしの噂をしている少年たち
を見かけた。少年のひとりには危うく気づかれかけたが、
わたしは座敷牢の小さな窓から彼らの様子を覗き見、話
を聴いていた。

そこにこの青年が現れた。彼はわたしのことを探って
いた。そんなひとが現れたのは初めてだった。そしてな
により、その白い——

気がついたら、わたしは紙に向かっていた。手紙を書
くことにしたのだ。

その手紙には、このお屋敷に住む人々のことや自分の境遇、この座敷牢を梶棒を持った屈強な男が守っているということ、そして……一瞬ためらったが、助けてほしいという趣旨のことを書いた。

最後に手紙は問わない、と付け足した。

しかし問題がひとつあった。窓からその紙を投げ飛ばす必要があったのだ。

この部屋は二階だが、お屋敷と彼がいる裏の通りの間には塀がある。ただ紙を丸めて飛ばしたのでは、彼のところまで届かずに途中で落ちてしまうかもしれない。塀の内側に落ちてしまえば一巻の終わり。今度は窓もないところに閉じ込められてしまうだろう。殺されることも考えられる。それはなんとしても避けたかった。

わたしは考えた。小平太からもらった本に挟むことも考えたが少し心許なかった。そこで思い出したのが、小平太の用心棒だった。

前夜、彼がこの座敷牢の中で忘れていったものだ。わたしはそれを拾って、引き出しに入れておいたのだった。まるで矢文のように、用心棒に手紙をギュッと結びつける。青年が少年たちから離れるのを見計らい、それを窓から放り投げた。重さのある用心棒はブンブンと回転

し、彼の足元に落ちた。

その紙片——手紙を読んだ青年は右手を挙げ、わたしに合図をしたのだった。

「君の境遇からしたら、賭けだったのだろうね」

心を読んだかのように青年が言う。

わたしは頷く。まさしく賭けだった。その手紙を気味悪がって捨てたり、お屋敷の住人に届ける可能性も当然あったからだ。

——それでもわたしには少しの、ほんの少しの勝算があった。彼の真つ白な髪の毛を見遣る。

わたしを探す、白髪の青年。

「それでも、君は賭けに勝ったんだ」

青年に差し出された手を、わたしはシッカリと握った。

*客間

わたしは十二年ぶりに座敷牢から出た。

「――」

特筆すべき感嘆もなしに、わたしはそれを見下ろしていた。客間にいる弓彦と朱次郎——否、ふたりだったも

の——否々、ふたりだろうと思われるもの。

十数年ぶりに見たふたりは、血と別の何かを吹き出し
転がっていた。ただただ、滑稽だと思った。

ふたりは頭を割られ、間違ひなく死んでいた。

わたしは白髪 of 青年を見遣る。

「アア、ウン。邪魔だったから」

彼は事もなげに言い、右手に持った斧を掲げる。薄暗
い座敷牢の中では気付かなかったが、よく見るとその刃
には錆以外のものも、こびりついていた。

その二つの死体の奥に、百合子が座り込んでいた。俯
き静かにわらっている。瞳には光が宿っていない。

焦点の合っていない双眸そうぼうが虚空と対峙していた。

夫と実父が無惨に転がっているこの地獄絵図たる状況
に放り込まれ、彼女の精神は蹂躪され尽くしたらしい。

わたしはこの女が好きだった。

最後に顔を見たのは三年前。もちろん座敷牢の小さな
窓からだが、わたしは母である百合子を愛していた。

わたしとは正反對な、鳥の濡羽色の髪。やはりわたし
とは全く違う漆黒の瞳。そのどちらも愛おしかった。羨
ましくもあった。

そしてなにより、わたしは彼女の声を愛していた。

普段の落ち着いた声も、夜に聞こえてくる声も。たと
え相手が弓彦でなろうが、たとえ相手が彼女の——で
あろうが、そんなことはわたしには関係なかった。

ただ彼女の声を聴いていたかった。声の世界に浸る、
わたしの唯一の恋だった……のだと思う。だがそれも、
もう叶わなそう。

それだけが、少し残念だと思った。

青年はわたしの右手を取って歩を進める。

玄関には女中の早苗が仰向けで転がっていた。胸に血
が滲んでいる。こちらは斧ではなく、なにか細い刃物の
ようなもので刺されたようだった。

さあ、お屋敷を出ようといったところで、

「その格好では寒いだろうし、なによりきみのソレは目
立つから、これを着るといいよ」

彼はわたしに、自分が羽織っていた外套を頭から被せ
た。青年の体温が残っていて、温かった。

少しだけ、心臓の動きが早くなったのを感じた。わた
しに物をくれたのだ。何かをお返ししなければ。そんな
ことを思いながら、わたしはそれを着て、青年の左手を

ぎゅっと握った。

わたしたちはお屋敷の玄関から外に出た。

* 山道

お屋敷から雪道を半刻ほど歩いた山の中に、わたしと白髪の青年はいた。息を吸うと、身体の中を寒さが貫く。

「このあたりまで来れば大丈夫かな」

そう言つて青年は、わたしの右手を放した。

「それにしても、彼には悪いことしたかな」

青年は残念だったと言つたが、変わらず笑顔だった。

「あなたがあの探偵を撲殺したのよね？」

「うん」彼は呆気無く答える。「君が矢文の矢の代わりに使つたあの棍棒で、彼を撲殺した」

彼はあの探偵を撲殺した。あの用心棒を使って。

「ありがとう、わたしのために」

——わたしを、あの密室から救い出すために。

『小・平・太』という座敷牢の錠前を取り除くために、彼の用心棒を使って殺人事件を起こしたのだ。

わたしは『手段は問わない』と手紙に書いた。しかし、このような方法を使うとは予想出来なかった。

座敷牢は屈強な小平太が守っていた。あの座敷牢の前の部屋で、そこからほとんど動かない。小間使いなど嘘っぱちで、それが彼に与えられた仕事だった。

「一週間調べてみたけれど、彼は外に全然出てこなかった。だからどこかへ連れ出すか、殺すかしかなかったんだ。いくら僕が斧を持っていたても、彼を殺せなかったんだろうね。出てこないから不意打ちも出来ない」

わたしは頷いた。彼は一週間の間、わたしの知る限り一度も座敷牢の前を動いていない。

「だから、僕は彼の棍棒で殺人を起こし、嘘の告発をした」

密室を開けるための殺人とは。

わたしはクスリと笑つた。座敷牢の中で読んだ物語とは全く逆ではないか。

「これが今回のカラクリ——いや、カラクリというのも恥ずかしいくらいの子供だまし、猫だましつてやつさ」

彼はカラカラとわらう。それは狂人の笑顔だった。

「あなたがあの探偵を雇つたの」

「探偵が探偵を雇つても、なにも問題はあるまいさ。それに」彼は一旦区切つて続ける。「表面上は同じ宿に泊まっていただけの赤の他人だから、そう疑われることも

ない。物取りでもなかったわけだし、僕の証言で疑いは自然に茜ヶ崎家に向く」

そうね、とわたしは頷いた。この質問もどうせなんの意味もないことだった。

わたしは自由になったのだ。

「ああ、そうだ」青年は言う。「きみの名前をまだ訊いてなかったね。えっと……」

ふと、青年を初めて見た朝を思い出す。

ふたりの少年と、白髪の青年。シドウハルカと名乗った彼。犬の鳴き声——クロの鳴き声。

わたしは——

——そうだ。わたしは。

「……君の名前は？」

わたしは首を、横に振る。

「……ないのかい」

わたしは首を、縦に振る。

わたしには名前がなかった。

はじめからなかったわけではない。しかし、誰も呼ばない名前の、その存在は無意味だった。

自分自身でも、もう覚えていない。

わたしは、名前がうらやましかった。

彼がわたしの頬を袖で拭ってくれた。わたしは顔が熱くなるのを感じる。頬を涙が伝っていた。

「ねえ」わたしは青年に言う。「探偵さん、お願いがあります」

「なんだい」

「わたしに、名前をください」

彼はいいよと笑い、

「あつ」

わたしを、ギョツと抱きしめた。

——その刹那、何かが頭の中でガチリと音をたてた。

双子のようにそっくりな、もうひとりのわたしを、わたしが俯瞰ふかんしている感覚。こわい、時間の、感覚——

「しゅだんはといません」

——わたしは、彼に抱かれながら、言っていた——

なまえをください。わたしになまえをください。それだけだった。なまえなまえ、なまえがほしい。

わたしはうれしかった。ふつうのひとはじゆうなのがあたりまえ。むしされないのがあたりまえ。

なまえがあるのがあたりまえ。

これはまちがいなく、かんしゃのなみだ。

わたしをたすけるためにここやってきてくれたかれ。

わたしをたすけるためにひとをころしたかれ。なみだを
ながすわたしをだいてくれるやさしいかれ。

これはまちがいなく、かんしゃのなみだ。

——彼はわたしの身体を抱きながら、何か言っている。

「どんな名前がいいかな」わたしは彼に言う。「たんで
いさんとおんなじがいいです」彼はわたしを抱いたまま、
アハハと笑う。「これは恥ずかしいことを言うナア」わ
たしも彼に抱かれたままアハハと笑う。「そうだなア、
雪……」——

わたしはかんしゃしている。

さいごに……こんなわたしに、なまえまでくれるとい
うのだから。

——わたしは彼の腰に手を回す。「きみは雪のようだ
から……白なんてどうだい？」何を言っているかはよく
わからなかった。ベルトに括りつけられているのは、先

程からずっと見えていた。「ありがとうございます」鋭
利な包丁。しゅだんはとわれない。早苗を突き刺したのだ
ろう、血糊が付いている。「紫藤白、いい名前だろう」
わたしはそつとそれを手に取る。「いいなまえ」しゅだ
んはとわれない。思ったよりも簡単だった。しゅだんはと
われない。そしてそのまま、彼に抱かれたまま、その刃を
彼の背中に——

ありがとう。

——わたしは彼の背中を、貫く——

ありがとう。

——逃げる青年を追い、貫く——

ありがとう。

——やがて、彼は動かなくなった——

ありがとう。

——わたしは外套を脱ぐ——

「ありがとう。おかえしを、しなくちゃ」

——わたしは、彼に覆いかぶさった——

……………。

——わたしは、わたしを黙って見ていた——

＊

わたしの真つ白な髪と真つ白い着物を濡らしていた彼の血は、既に乾き黒ずんでいた。黒く固まった髪の毛の一房を手に取り、これで百合子に近づいたかしらんと、なんとなく思った。ほんの少し嬉しかった。

彼は外套と共に木の下に置いてきた。わたしはいま薄手の着物を引つ掛けているだけだったが、不思議と寒いとは感じなかった。

今までなかった物を、ようやく手に入れた。犬でさえ持つていて、それでいてわたしにはなかったもの。

名前。

彼がそれをくれた。感謝してもしきれない。それでも……なぜだか、あまり楽しくなかった。

ふと、お屋敷の方角を見遣る。ここからはお屋敷の正門が見える。もう誰もいないお屋敷——否、百合子がいなかったのか。

お屋敷の奥にある空はすでに濃紺に染められていた。ふと青年を見かけた朝の日の出を思い出す。わたしはそうか、と思った。

陽は西に沈むのだ。ならば陽の昇るあの方角は——

——笑いがこみ上げてきた。なんだか、面白かった。

わたしはある物語の、一節を思い出した。彼は……あの白髪の青年は、わたしを打ち破るべきだったのだろう。

わたしがあの座敷牢に閉じ込められていた理由。きっと、この容姿だけが原因ではなかった。小平太の背中の、醜い傷を思い出す。わたしはきつと、十二年前にも、噂通り……ひとを喰ったのだ。

わたしは小平太の錠前としての役割を、少しだけ見誤っていたのかもしれない。

座敷牢の中には、異の鬼が棲んでいたのだ。

わたしは——紫藤陽花はカラカラとわらった。

「告発」

かたこと
方功
てつふみ
鉄文

扉を押し開け、部屋に入る、
此処は、所長室と呼ばれる部屋だ。

作り付けの資料棚、下の通りが見渡せる窓、そして、
事務機のセットが一つあり、頭上ではシーリングファン
が、薄い陰影を描きつつ、緩慢に廻っている。

後ろ手に扉を閉め、一人になった私は、事務機の椅子
に座り、古いパーソナルコンピュータの出力装置で、
印字された、リスト形式のテキストや、証拠の品と成る、
「カフスボタン」と、「ピッキング用の固定具」などを、
確かめるなど、幾つかの作業をした。

暫しの検分を終えると、諸々の「証拠品」を、コート
の内ポケットに、丁寧に仕舞い、扉の方向に目を向けた。

其処には、もう何も情報を発することの無い物体と、
成り果てた、毛布にくるまれた死体が転がっている。

ふと死体の^{まぶた}顔を閉じてやった事を思い出した。
何も出来なかったことが悔やまれる。

彼との思い出や、感傷を振り切り、事務机から見て、
扉の左方向に有る、窓へ歩み寄る。

開いた窓の外は、薄曇りの今にも泣き出しそうな天気
だが、沈鬱な私の心境には、ふさわしいかもしれない。

下方に視線を向けると、此処へ来る時に、何度も見た、
裏通りが視界に入った。

相変わらず窓の下には、違法駐車トラックや車が、
停まっただけで、中身が溢れかけたゴミ箱などと並んで、
無秩序さを醸^かし出している。

人の生きている証ではあるが、薄汚れ、見ていて、
気持ちの良いものではない。
ブラインドの紐を引き遮光する。

さて、やるべき事をやらなくてはいけない。
この事件の、真実を、伝えるべき皆に知らせるのだ。

暫し黙考したのち、コートのポケットに手を突っ込み、目的の物を探し出すと、ボタンに、手を滑らせながら、事務所へ繋がる扉を、引き開けた。

事務所を一眺めた私は、

「さて、皆さん」

と、切り出す。

探偵として、此処はそういうべきだと思ったからだ。

「皆さんも知つての通り、被害者は、この所長室の主、私とも、深いつながりがある人物です」

「この殺人事件の犯人は、探偵事務所の所長室、つまり、この部屋に通じる扉を、二つ開けて入って来ました」

「所長室への扉と、事務所入り口の扉です」

「手袋をしていたとみられ、ノブや錠などに、指紋は、残されていませんでしたが、入り口の扉にはピッキングの痕が、残されていました」

「被害者の彼は、在室中でしたので、この扉は、秘書を装いノックして、鍵を開けさせたのでしょうか」

「彼は無警戒に扉を開け、そこで至近距離から、腹を、二発撃たれた様です」

「銃弾の一発はわき腹を貫通し、扉の対面の壁、扉方向から見た事務机の左横辺りに、突き刺さっていました」

私は、コートの内ポケットから、ビニール袋に包まれ保護された「証拠品」類を取り出す。

「発見された、二十二口径ショートタイプの弾丸から、小型拳銃の類で、撃たれたと推測されます」

「しかし、被害者は失血死する前に、最後の抵抗の格闘を試み、相手のカフスボタンをもぎ取った上、恐らく、ポケット等からでしょうが、指紋の付いた、ピッキング用の固定具を取り落とさせる事に成功した様です」

「ピッキングは、繊細な作業ですので、犯人も手袋を、取って、作業したのでしょうか。本来は現場に残す物でも無いので、指紋が着いても構わない道具類です」

「また、此方のカフスボタンは、この象牙質の、美しい外見から推測して、牛乳が原料などではない、本物の、高級品でしょうし、そうであれば、販売ルートなども、細かく調べられるでしょう」

「さらに、高級だとはいえ、日用品ではありませんから、指紋や、皮膚片が残っている可能性もあります」

「ちなみに、固定具は、事務所と所長室の扉横にある、サイドテーブルの下から、カフスボタンは、被害者の、閉じた手の平から発見されました」

「以上の証拠から犯人の足取りを追うことも出来ませんが、態々そのような事をしなくても、被害者は一枚のメモを、残してくれています」

私は、先ほどのリスト形式のメモを、事務机から、取り上げてみせる。

「これは、ある人物の、一種の殺人記録です。もちろん、その人物名も、リストのトップに書いてあります」

「最近被害者は、このリストに関する記録を調べており、その、ある人物こと、『海士涼』あもつりようにも、コンタクトを、取っていました」

「名前に聞き覚えの有る人も居るはずですが、業界では、可也の有名な人ですから」

「若くして、興信及び、探偵業の大きな事務所の、社長であり、眉目秀麗且つ、天才的頭脳を持つ人物として、人気も高く、世間を揺るがすような、事件が起こる度に、メディアにも露出していましたしね」

「売れない私立探偵の身としては、正直、羨ましい限りですが……」

「しかし、『海士涼』には人知れる事の無い悪癖、いや悪癖では済まされない、連続殺人者という裏の顔が、有ったようです」

「ただし殺人といっても、全て、自殺のお膳立てやら、遺産騒動の火付けなど、自らは、一切表に、出ないものばかりです」

私は、リストの年月日、被害者、加害者の姓名、死因、事件処理結果など、一部を読み上げる。

項目は全部で二十組ほどあるが、全部を読む事もあるまいと、三、四例を音読してやめる。

「私は、古い警察の知り合いに、頼んで事件を調べて、貰いました」

「半数が事件にすらなっていませんでしたし、もう半数も、実行犯は捕まっています」

「さらに、罪を認めている、実行犯の殆どは、自分が、犯行を自発的に計画し、そして実行したと、思っているようです」

「そう、死体の山を築きつつも、この犯人『海士』は、一切、手を汚していないのです。問えて幾つかの殺人、自殺教唆の罪のみでしょう」

「そして、自らに直接利益の出る事件は、一つたりとも起こしていませんでした」

「人間関係の綻びという導火線に火を付け、その経過を観察しているに過ぎません。その観察こそが、犯行理由だったとも推測できますが」

「部下を抱えた探偵と言う、常に事件の外側に属した、先ず、容疑者とは成り得ない立場に、居たからこそ、出来た犯行ともいえます」

「実際、各事件の犯人に、直接接触させるのは、何も、知らない部下だったのでしょう」

「もちろん自分でも、姿を見せない所では、事件の種を探して、動いていたと考えられますが」

「複数の事件に関わる、影の端しか見せない、真犯人、それが『海士』の存在だったのです」

私は、其処で一息ついた。

長台詞を喋るには、肺が限界だったのだ。

「被害者は依頼のあった一つの事件から、自らが関わり、未解決で終わった似た事案を思い出し、類似例の調査を進めました」

「結果として、更に、幾つかの未解決事件にたどり着き、その一連の事件に、関連性を見出し、各事件の犯人に、殺害を教唆した人物の存在に、気が付いた様です」

「そして、トラブルを抱えた人物を装い、依頼人として『海士』に数度会い、言動から教唆の犯人である事を、確信しましたが、被害者も、ミスを犯し、気が付かない内に、相手に素性が、バレてしまっていたのでしょう」

「今まで、巧妙に隠していた筈の、自らの存在に近づく者が、遂に現れ、恐らく必要以上に焦った、『海士』は、保身に走らざるえず、被害者の詳しい素性を洗い、今日、皆さんが居ない時を見計らい、自ら、この探偵事務所を、襲った、そう考えられます」

「用心の為に鍵が掛けられていた、事務所入り口の扉は、ピッキングで開け、所長室のこの扉は秘書の振りをして、被害者に開けさせました」

私は、それぞれの扉を指差しながら、そう説明した。

「扉を引き開けた被害者は、『海士』の姿と、手袋を、着けた手に握られた銃を見て、即座に、回避防御姿勢を、取るうとしますが、その間も無く、わき腹と肝臓付近に、二発続けざまに銃弾を受けた様です」

「しかし、即死には至らず、痛みを鉄の意志で、押さえ込み、事務所側に居た犯人に襲い掛かり、格闘となり、スーツのカフスポタンを、奪い取ったと考えられます」

「それが、先ほどの、証拠品、手に握られていたボタンです」

「もしかすると、被害者のツメの間には、『海士』の、皮膚片が残っているかもしれませんが、これは、警察の、捜査を待たないと、成らないでしょう」

「また格闘になったことから、戦闘相手の髪の毛なども検出されるかもしれませんが。何れにせよ警察がキチンと捜査すれば、犯人の素性は明らかになる筈です」

「さて、格闘は、当初体格で勝った被害者が優勢でしたが、比較的直ぐに、失血から劣勢になり、この扉越しに、事務所から所長室に弾き飛ばされ床にへたり込まされたと推測されます」

「そして、失血が限界に来て、動く事も適^なわなくなり、そのまま亡くなりました」

私は、その事実にか、静かになった事務所を見回す。私自身の長年の相棒も、瞑目している。

この景色も、もう無くなるのかと思うと寂寥^{せきりょう}の念を、禁じえないが……

ともあれ一息ついて、続きを話し始める。

「『海士』は、亡くなったと見られる、被害者を放置し、去ります。初体験であった『殺人』に対して、そして、思わぬ反撃に、相当に動揺していたと、考えられます」

「実際、この時、事務所入り口の扉を開けるのに使った、ピッキング用の固定具を、格闘時に、ポケットなどから、取り落とした事に気が付いていませんでした。それ所か、被害者がスーツのカフスポタンを、もぎ取った事にすら、気が付かない有様だったのでしょう」

「勿論、これらの犯人と被害者の動きは、血跡の向きや、弾痕、証拠品の位置などからの、想像ですが、事実と、大きく違っている事は、無いと思われます」

「ちなみに、へたり込んだ被害者に、止めの銃弾を撃ち込まなかったのは、恐らく、所持していた銃器が、所謂デリンジャータイプなどの、装弾数が限られた小型拳銃だった所為だったと推測されます」

「これは、格闘時に、再度撃たなかった事や、壁から、発見された、二十二口径の弾丸からも裏付けられます」

「恐らく既に、証拠隠滅の為に、銃は捨てられていると、考えられますが、もし発見されれば、入手経路などから、『海士』の犯行を立証する大きな証拠となるでしょう」

「以上が、この事件の『真相』です」

私は、言うべき事は言ったと思った。

無人の事務所を眺め、トレンチコートのポケットの中に、忍ばせたICレコーダーのボタンを押し録音を終了する。

そう、これは、推理でもなんでもない。

現場状況と被害者が残した手がかりから、考えられるストーリーを、口にしたただけなのだ。

身内も関わった、ある事件の顛末で刑事を辞させられ、探偵業で糊口をしのぐハードボイルドを気取った人生を送らざるを得なかった私だが……

一度は、本格派名探偵の真似事を、やってみたかった。それだけである。

毛布に包まれた死体を跨ぎ、事務机に戻りパーソナルコンピューターを起動する。

メーカーのロゴが消え、ガリガリとハードディスクが、動くのを待って、ポケットから取り出した、タバコに、マッチで火を点ける。

もはや、成すべき事は決定されている。

計画通り、趣味の写経用の溶ける紙を、五十枚ほど、事務机から取り出し、紙のロープを作り始める。

無心に、紙を細く畳み、紐状にする事を繰り返す。

ロープを作る作業中にコンピューターが起動したので、一旦作業を止め、ICレコーダーで録音した、先ほどの音声ファイルを、コンピューターにコピーした。

そして、コピーした音声ファイルと、例のリストの、完全版を添付した、何通かのメールを作成する。

全て信頼の置ける人間だ。

件名と本文には、各人へのメッセージを添えた。

メールの作成を終えると、ICレコーダーから、音声ファイルを消した。

再び、紙のロープを作る作業に戻る。

予報どおり、雨が降り出してくれば良いのだが。

一応簡単な実験はしてあるが、実地でどうなるかは、判らない、その辺は運任せだ。

小一時間経ち、細く畳まれ紐状になった、溶ける紙を、全て結び繋げ終わると、ロープが完成した。

さて、最も気の重い作業に、移らねば成らない。

何本目かのタバコを、愛用の灰皿に、押し付けて消し、椅子から立ち上がった。

毛布に包まれた死体に歩みより、手袋をして、屈み、首輪に作ったロープの先を通して結ぶ。

彼はもう二十歳の老犬だったのだ。子犬の頃より此処で生活していたが、心臓が弱っていて、今朝私が事務所に着いた直ぐ後、待っていたかのように、何度目かの、発作を起こし、私の手の中で、静か息を引き取った。

実は、かく言う私も、70過ぎと言う年の割には壮健そうにみられるが、先日、腰痛で、医者に掛かった所、転移した末期癌が見つかり、あと数ヶ月の命らしい。

その二つの要因があつて、先ほど、最期の大仕事に、掛かる事を決意したのだ。

思い残す事の、殆ど無くなった人間の足掻きである。幸いというか偶然にして、準備は殆ど整っていた。

後は「覚悟」だけであつた。

最期の大仕事、それは、件の「海士涼」を表舞台に、引きずり出す事である。

「海士」に拘^{こまわ}るのは、正義感からではない。

奴の作った事件により、我が妻は、殺された。

そして、結果的にだが、私も警察を辞めさせられた。

正義感も無くは無いが、原動力はやはり復讐心だ。

我が妻の事件、奴にたどり着く、切っ掛けとなった、先日の案件、そして、その後の類似事件を中心とした、裏付け調査からも、奴の間接的関与は明らかであつた。

上流階級のクライアントに、変装してコンタクトを、取った時に、偽の状況の説明に対しそれとなく示唆してきた事柄を考えれば、「海士」が一連の事件の真犯人、黒幕である事は間違いない。

三十代後半という奴の年齢を考えれば、十代の頃から犯行を、重ねてきた筈だが、物的証拠は、昔の事件でも殆ど残しておらず、具体的にソレを告発する手段は無い。

最近の個々の事件についても、所員の不手際とされてしまえば、其処で終わりである。

正直手詰まりだった。

などと、思い返しつつも、紙ロープのもう一端を、

二連発小型拳銃「ハイスタンダード・デリンジャー」の、グリップ部と、トリガーの間を通した上、グリップ部に、何度か巻きつける。

この小型拳銃は数日前「海士」の事務所に忍び込んで、社長デスクの、引出し天板裏から、入手した代物である。小型拳銃だけでなく、もぎ取られた、カフスポタンと、ピッキング用の固定具も、事務所に、忍び込んだ時に、拝借した。

カフスポタンについては、流石に目立つので、その場に有った物で細工しておいたから、暫くは、気が付かないだろう。

同時に、デスク上のヘアブラシから、毛根の着いた、髪の毛を、コンピューターのマウスの、ボタンや本体の分割ラインから、手垢を、採取しておいた。

ちなみに、「海士」の事務所からは、事件に関わる、資料などは、一切発見できなかった。

証拠は全て頭の中か、暗号化されたコンピューターに、保存してあるのだろう。

一連の拝借……というか、窃盗した物品は、元々は、単に証拠集めの為であった。

「海士」のデスクから、偶然発見した、指紋のついた小型拳銃については、しかるべき国家機関に送りつけて、動揺を誘う為だったのだが、こんな使い方に成るとは、拝借した当時は、思いもよらなかった。

小型拳銃のグリップに巻きつけた、紙ロープの端と、一周前のロープとを、固く結び、引っ張ってみる。

ふむ、簡単には切れない。
十キログラムぐらいなら、何とか支えてくれそうだ。
長さも、これで丁度いい筈だ。

小型拳銃「ハイスタンダード・デリンジャー」には、二発の実弾が装填されている。

もちろん此れも、銃を「海士」の事務所のデスクから、拝借した時のままだ。

拳銃の指紋については、例の変装してコンタクトを、取った時に、採取した指紋と一致が確認できた。

つまり本人の指紋である。

尤も殺人を犯す人間が、指紋を残すかと言う疑問は、当然出るだろうが、少なくとも、疑いの眼は其方に、向くのだから、目的としては問題ない。

疑いの眼という点では、「海士」とのアポイントを、計画を決めた後、直ぐ電話で取り付けてある。

そう、時間は丁度今時分だ。

尤も、そこに私が現れる事は、絶対に無いのだが。

奴に、僅かでもアリバイの無い時間を、作るだけで、十分だったのだ。

なお、実際には、「海士」は私の正体には気が付いていないと思われる。

気が付いていれば、とうに、何らかのアクションを、起こしているだろうが、そういった様子は見られない。

窓の外がそろそろ泣き出しそうだ。頃合かもしれない。

医者から処方されている、痛み止めでも抑え切れない、腰の痛みを押して、屈んだ状態から、立ち上がる。

「証拠品」のピックアップ用の固定具をビニール袋から出し、事務所の扉横の、サイドテーブル下に投げ入れ、「犯人」の髪の毛を、格闘の「あった」場所に置く。

カフスボタンも、「倒れるべき」場所に配置する。

そして、既に開錠傷などを工作してある、入り口扉の内鍵を解き、事務所と所長室の扉も全開にした。

事務机に戻り、コンピューターから、先ほど作った、メールと、事前に作成した、事務書類を送る準備をする。

データを送信する段階で、数瞬躊躇ってしまった。

送り先の人物たちの顔を、一人一人思い浮かべたのだ。

なに、別れが数ヶ月早くなるだけだと決意しなোস。

彼らは、さっきの名探偵ゴツコの音声記録で恐らく、これから起こす事の真相は、理解してくれるだろう。

彼らに良い未来が訪れん事を、と願い、送信ボタンを、押した。

メールが送られた事を確認した後、用意しておいた、ハードディスクのデータ完全削除ソフトを、起動する。

デスクトップ画面に飾られた、亡き妻と、娘の写真に、別れを告げ、ハードディスクの、データ削除を開始した。

左手の手袋を外し、「証拠品」のビニール袋から、「海士」の手垢を、左手のツメに不自然でない程度に、塗りつける。

当然気分はよく無いが、此れもまた必要な作業だ。右手は最後まで手袋を脱ぐわけには行かないので、そのままとする。

作業を終えた後、吸殻の残った灰皿に、「証拠」を、保存していた、ビニール袋を重ねて置き、火を着けた。鎮火を確認し、最後に「推理」に使った例のリストを、机の下に落として、事務机からは離れた。

離れる直前、ふとICレコーダーの消去も必要だと、思いなおし、ICレコーダーをコンピューターから外し、最低感度、高音質に設定して、録音ボタンを押し、机の引出しに放り込んだ。

二十分位で、全データが上書きされるだろう。

小型拳銃から伸びる、溶ける紙のロープを右腕に巻きつけ、毛布に包んでいた相棒の死体を窓へ運ぶ。

丁度良い具合に、窓の下に幌着きのトラックが止まっている、うまくいけば、あのトラックに載ってくれる、かもしれない。

と考えて、彼に対して申し訳ない気持ちで、胸が、一杯になった。

涙が出そうになるが何とか堪える。状況が不自然に、なつては困るからだ。

何れにせよ、彼の「死因」は、襲撃犯に突き飛ばされ、窓から転落した事による、全身打撲に成るだろう。

ブラインドを半分ほど上げ、相棒の死体を、窓の外に出し、首輪から伸びるロープを下ろしていく、ロープは耐えてくれているようだ、

そして中型犬十キログラム近くの重みが腕に掛かった。地獄の責め苦にも思える重みに逆らって、事務所への扉の方へ歩いていく、そして開けた扉の前の床に立つ。

紙ロープで腕からさがった小型拳銃を、右手に持ち、左わき腹を、出来るだけ遠くから撃った。

激痛が奔る。

腰痛の痛み止めなど、効きもしていない。気絶しそうになったが堪え、状況を確認する。

予定通り、弾丸は旨く貫通したようだ。

これで最低でも、事務所の壁に、弾丸のサイズは、記録された。

弾丸の行方を確認できたので、這いつくばりながら、事務所のほうに進む、格闘による血痕をつければ、成らないからだ。

相棒の重みを背負いつつ行動し、何とか血痕を、付け、元の位置に戻り座り込む。

もう、意識を保っているのも辛い、被害者として、まだ、やることはある。

止めを刺さねば成らないのだ。

最期の気力を振り絞って、右腕から紙ロープを外し、左手で、紙ロープを補助しながら、先ほどと同じ様に、小型拳銃を、肝臓の辺りに狙いを定める。

再度、トリガーを引いた。

手から力が抜け、小型拳銃は、我が相棒を重しにして窓の外へ飛んでいった。

かすかに鈍い打撃音が聞こえた、音からすると旨く、トラックの上に載ったのだろうか……

薄れる意識の中、右手に手袋をつけたままだという事に思い当たる。

緩慢に腕を動かし、口で手袋を外し、そのまま後ろに投げ捨てた。

キッチンと左右一緒にしまっておかないと、いけないの
だが、もうそんな余裕は無いなど、諦める。

空が、泣き出したようだ……

そして、トラックが走り出す音が聞こえた。

願わくば、この馬鹿馬鹿しい告発が、功を奏さん事を。

彼女が裁かれん事……



刹那

まりむらけいと
麻里邑圭人

ぽつぽつと、冷たい雨が降り出してきていた。

降りそうで降らなかった空は、ここに至ってようやく

堪え切れなくなっただけ。

しんと静まり返った、寂れた街道に響き渡る雨音。

地面に点々とつく黒い染みは、瞬く間に大地を埋め尽くす。

ひどく疲れているのか、頬を打つ雨の感触はあまり感じなかった。

……

私の目の前には、浅黒い男の顔があった。

針鼠のように逆立った黒髪。痩せて頬骨の浮き出た頬。

蛇を思わせる陰湿な目がじっと私のことを睨みつけている。

それは、本来なら二度と見たくないはずの顔だった。

特に、私の両親を殺した男の顔であるなら、尚更。

*

父さんと母さんが殺されたのは、今から三年前のことだ。

蒸し暑い夏の午後。いつものように「行ってくるよ」と言ってお出かけたとき、そのまま二人は帰らぬ人となった。

一流の剣士だった父さんは死なない程度に肉体を切り刻まれ、散々弄ばれたあげく、首を落とされて殺された。母さんはその父さんの横で何度も犯された後、子宮を抉り出されて殺された。

後にモルグで対面した二人の亡骸は、まるで打ち捨てられたボロ雑巾のようだった。

呆然と立ち尽くす私に対し、憲兵たちはお決まりの文句を述べた後「手口から見て、恐らく『死神』の仕業でしような」と鹿爪らしい表情で語った。

『死神』——それは近年この辺りを騒がせている殺人鬼の通称である。その姿を見た者はたとえ子供であろうと容赦なく命を奪われる。

命からがら逃げ延びた者の証言によれば、そいつは夜の闇に溶け込むような漆黒の鎧を身に纏っていたと言う。その話は瞬く間に街中に広がり、それまで名前のなかった殺人鬼はいっしょか『死神』と呼ばれ恐れられるように

なった。

憲兵たちは言う。

「奴には陛下も頭を痛めていましてね。何とか始末したいとお考えになっている。しかし、過去に討伐隊を全滅させられたこともあって、誰もその役目を買って出ようとしていない。だから、君には申し訳ないが、いつそのこと、たちの悪い流行り病の類だと思つて諦めるしか……」

死が、いつだって理不尽なのは分かっている。しかし……。

……

その瞬間、私の心は決まった。

*

……そして今、その『死神』の顔が目の前にある。

私は目を逸らすことなく、じつとその顔を見つめ続けた。

頭をよぎるのは、感慨とは程遠い感情。だが、それをぶつけるべき相手はもうこの世に存在しない。

『死神』の首から下に目を向ける。そこには……何も存在しなかった。

ぶつとりと不自然に途切れたその先からは、今も真っ赤な血がどくどくと流れ出している——誰がやったのかは、言うまでもなかった。

私は『死神』の頭に向かって冷たく笑い掛けた。

（首の据わりはどうかしら、『死神』さん？）

だが、『死神』は答えない。

ただ黙つて、私のことを睨んでいる。

私はそれを見て優越感に浸ると共に、先程の死闘を思い出していた——。

*

闇夜に煌めく銀色の閃き。

風を切る音が、すぐ耳元で聞こえる。

そして、次の瞬間——剣を握る手に衝撃が走った。

「く……！」

思わず剣を落としそうになるのを必死で堪えると、私はキツと前方を睨みつける。

耳障りな笑い声が聞こえた。

「ははは！ 俺を倒すだなんて威勢のいいこと言っておきながら、所詮はお前も口だけか？」

笑い声の主は、漆黒の甲冑に身を包んだ蛇のような目をした男。

奴こそが父さんと母さんを殺した憎き仇『死神』！

かつては賑わっていたこの街道もこいつのせいですっかり寂れ、今や人っ子一人通らないゴーストタウンならぬ、ゴーストストリートと化してしまった。

私は唇を噛み締めると、次に来るであろう衝撃に備えて剣を握り直した。

今の一撃を受けただけで、両手はかじかんだようにびりびりと痺れている。

そんな私とは対照的に、『死神』の口元には余裕の笑みが浮かんでいる。

「……そらよ、もういっちゃよ！」

再び風を切る音と共に、二度目の衝撃が両手を襲った。剣が弾き飛ばされなかったのは、全く幸運だったとしか言いようがない。

だが、その幸運もいつまで続くとは限らない。

私の舌打ちが聞こえたのか、『死神』は呵々大笑した。

「はは！ どうした？ ひよつとして手も足も出ないのか？」

「……」

私は答えない。『死神』は続けて

「でも、安心しろよ。俺の剣を一度ばかりか二度も受け止められた奴なんて、そーいやしな。ましてや、お前のような小娘なら尚更な」

……ごろごろと、低く雷鳴の音が聞こえる。

『死神』は私を冷やかな目で見つめると、静かに、しかし確信に満ちた口調で言った。

「だが……間違っても三度目はない」

私は、汗ばむ手でぎゅっと剣を握り締めた。

この剣が弾き飛ばされたその時点で、私の未来は確定するだろう。

父さんと同じように首を切り落とされるか、あるいは母さんと同じように子宮を抉り出されるか……どちらにしろ、思い半ばで死ぬことに変わりはない。

無念を残したまま死んでいった父さんや母さんのためにも、それだけは何としてでも避けたかった。

だが、二度にわたる打ち合いで既に『死神』との力の差は思い知らされている。

いや、力だけではない。技、体力、スピード……悔しいが、どれをとっても向こうの方が圧倒的に私を上回っていた。

私が『死神』に勝てる可能性は、万に一つもないように思われた。

それこそ、奇跡でも起こらない限りは――。

……

そんな私の思考を断ち切るように、『死神』の剣が三度風を切る。

咄嗟に私は剣を構えたが――。

（な!?!）

今までがお遊びに思えるほどの、桁違いの速さ！

慌てて剣を構え直したが、間に合わない。

殺意の刃が、すぐ目の前まで迫ってくる。

「終わりだ、小娘！」

――と、その時。

ズガー――ン!!

何が起こったのか、分からなかった。

辺りに飴する、耳を聳するような爆音。

それと同時に、目映いまでの閃光が私の視界を真っ白に染め上げる。

「な……!」

その音に気を取られたのか、一瞬だけ『死神』の剣のスピードが落ちたのを私は見逃さなかった。

（今だ!）

白く霞んだ視界の中、私は『死神』の首目がけて渾身の力を叩き込む。

「くらええええ!」

「この……小娘があ!」

次の瞬間、二つの刃が交錯し、飛び散る血しぶきが夜空を真っ赤に染めた。

*

……徐々に強さを増していく雨の音に混じって、ぱちぱちと火の爆ぜる音が聞こえる。

私はそこで一旦回想を打ち切ると、ゆっくりと音の聞こえた方へと目を向けた。

そこに立っているのは、すっかり枯れ果てた一本の老木。かつては鮮やかな緑色の葉を茂らせていたその木も、今は鮮やかな紅蓮の炎に包まれている。

それは、まさに神が起こした奇跡だった。

もしあそこで落雷が起きなかったら……間違いなく私

は『死神』に成す術もなく敗れていたことだろう。

風が吹いて、朱い炎がゆらゆらと生を持ったように揺れる。

……だが、かく言う私もただではすまなかった。

私は、自分の首から下を見下ろす。

そこには——本来あるべき体が存在していなかった。

『死神』と同じように私の首の切断面からも、おびただしい量の血が流れ出している。

あの時、私の剣が『死神』の首を捉えたと同時に、

『死神』の剣もまた私の首を捉えていた。

ここからでは見えないが、私の体もどこかその辺に転がっていることだろう。

白みがかっていた視界が、一転して墨を流したような暗黒に覆われていく。

結局、私の未来は確定してしまったけれど、結果的には満足している。

もともと勝てる見込みのない勝負だったのを、何とか相打ちまで持ち込めたのだ。それだけで、私としては充分だ。

凍て付くような冷たい雨が、地面に染み付いた私の血を洗い流すように降り注ぐ。

……ああ、そろそろ終わりの時が来たみたいだ。

私は最期の力を振り絞ると、血の気の失せた唇を震わせる。

（父さん、母さん……仇はちゃんと討ってあげたからね……）

そして、いつになく穏やかな気持ちで、ゆっくりと目を閉じた。

風が吹いたら 五十円玉二十枚の謎

二丁 にちよう

1

「五十円玉二十枚の謎」という企画を御存じだろうか。推理小説家の若竹七海 わかたけ ななみ が実際に体験したことを元にして持ちあがった企画である。

若竹七海は学生時代にある本屋でアルバイトをしていた。毎週土曜日の夕方になると、男がその本屋に来店し五十円玉を千円に替えてくれと二十枚のニッケル玉を差し出してきたというものだ。それを耳にした東京創元社の名物編集者、戸川安宣氏 とがわ やすのぶ がこの謎をテーマに競作を提案した。

この競作には若竹七海の「問題編」に対して法月綸太郎 のりづき りんたろう と依井貴裕 よりいたかひろ が「解答編」を執筆。この際一般公募も行われた。想像以上の応募があつたため、当初予定していた「創元推理1」での掲載を止め別冊として単行本化された。このときの応募者には、後々活躍することになる倉知淳 くらち じゅん や剣持鷹士 けんもち たかし もいた。

この企画は数年後もう一度行われ、その際に集まった

優秀作品は「新・五十円玉二十枚の謎」としてまとめられ出版されている。

2

「二丁さん、『五十円玉二十枚の謎』って、御存じですか？」

我らがKミステリクラブの会長、下田さん しもだ が僕にそう聞いたのは、いつもの定例合評会がちょうど終わつたときだった。

「ああ、あれですか。企画は知っていますけど、まだ読んでないですね」

鞆に資料を片付けながら答えた。僕は二丁健司 にちよう けんじ。このKミステリクラブの会員で、高校二年生だ。社会人ばかりのこのクラブでは最年少である。

午後の日差しが僕の目を差し、思わず目を細めた。

「そうですか。実はですね、今度の会誌であの企画をやってみようと考えているんですが」

下田さんは言いながらずれた眼鏡を直した。僕が所属するこのKミステリクラブでは年に一回会誌を作製する。原稿の締め切りまでまだ数カ月間があつた。できれば書

き下ろして何か創作を載せるつもりでいたのだが、肝心のプロットがさっぱり思いつけなかった。まだ時間があるからと樂觀視しているが、ただだらしているとまた去年のように過去の使い回しを載せることになるのは目に見えている。

「面白そうですけど、原稿が集まらないんじゃないですか？」

「そうですよねえ」

腕を組んで下田さんは考え込んだ。

「でも会誌全部をその企画でやろうというつもりはないんですよ。一応書けそうな人はぜひ、という形でやってみようと思ってて」

「下田さん、なにか書くアイデアがあるんですか？」
自分がやりたいネタがあるからこそ企画したのでは、と僕は考えた。

「いや、そういうわけではなくて」

下田さんとはっておきの秘密明かすように嬉しそうに言う。

「わたしの親戚の子が似たようなことに遭遇しているそうなんです。きみの地元に住んでいる子なんです。」

「それでちょっとやってみたくなくて」

下田さんはその人の勤め先を告げた。僕の自宅近くの書店だった。二日に一回は冷やかしに行く。

「へえ、あそこに。どんな人なんですか」

「きみと同じくらいの女の子、背の高い割と綺麗な子なんですけど、しばらく前からその本屋でアルバイトをやっているらしいんですよ。で、この間法事で会った折にその話を聞いたんですけれど」

面白そうだ、できれば話を訊いてみたい。ネタを得られればなお良し。

「ふうん、面白そうじゃないですか。ちょっと話を聞いてみたいですね。もし何か浮かべば会誌の原稿も書けるし」

「会ってみますか」

「断る理由が無いですね。他の人も誘ってみますか？」

僕らは他のメンバーにも声をかけた。二つ返事でOKかと勝手に決め付けていたのだけれど、意外にも全員欠席。現場が遠すぎる、というのが主な理由だった。彼女の住む富山は僕にとっては地元だが彼らにとっては車で一時間半はかかる距離なので、まあ無理もない。

結局、僕と下田さんだけで後日コンタクトを取ろうという話になった。

問題の女性、前原千恵との面会はそれから二週間後の日曜日に実現する運びになった。下田さんが忙しい中間を縫って約束を取り付けてくれたので僕は大いに助かった。

待ち合わせ場所は、問題の書店の横にある喫茶店「メル」だった。僕はあの極悪非道の銘探偵から名前を取ったのでは、と以前から考えているのだが本当のところは定かではない。そのうち思いきって尋ねてみようと思いはじめて、そろそろ半年が過ぎていく。

約束の時間の十五分前に僕は家を出た。愛用の錆びた安物自転車に跨り目的地を指す。店までは五分もかからない。秋の風が容赦なく身体に吹きつける。上着を羽織れば良かった、と後悔した。といっても元々人前に出られるような洒落た上着を持っていないし、上着を買うに行く上着も持っていない。洒落っ気とは無縁の人間なのだ。最近の開き直りつつある。

信号を一つ渡るともう目的地だ。僕は自転車を敷地に乗り入れる。少し説明を加えておくと、書店とメルは目の前の国道から一メートルほど低い土地にある。元は水

田だったところを買い上げて埋め立てた土地である。この敷地の出入り口は今僕が入った東側からの埋め立てた道があるだけで、他の場所からは乗り入れられない。待ち合わせの喫茶店は書店を通り過ぎたところにある。よく大型書店には喫茶コーナーがあつて一服できるようなっているが、ここはそれほど店舗が大きいのでそれがない。メルがここに店を出させてくれと書店に交渉したのはその立ち位置になることを狙ったからだろう。

兼用の駐車場にはまだ下田さんの車が見当たらない。腕時計を見るとまだ十分ばかり時間があつたので、僕は某作家の新作を買っていくことにした。自転車を書店東側の入り口に停める。書店には東と西の二か所に入り口がある。

店内に入ると一目散に新書のコーナーに向かう。探究本は見当たらない。僕は舌打ちをして近くの店員さんに聞いてみた。まだ入荷していないようだ。

ちょうど時間の二分前。僕は西から出てメルに向かう。新作は、また今度。どうせ積んでいる本は山ほどある。

メルの前で下田さんが待っていた。隣にいる女性は噂の前原さんだろう。先に入ってくれば良いのに。

「ちようど時間ぴったりですね」と下田さん。

「時間にはうるさいもので。中に入らないんですか？」
僕が訊くと下田さんは黙って店の扉を指差した。

〃店主体調不良のため本日臨時休業 店主〃

メルは中川^{なかがわ}という中年の店主が一人で切り盛りしている。あまり人好きのしない性格なのか、カウンタに客が座っても注文を受ける以外は黙って仕事をしている。なぜ客商売をやっているのか不思議だ。かなり几帳面な人物で、定休日の水曜を除き毎日午前十時半ぴったりに店をあげ、午後七時ぴったりに店を閉める。客が残っているも追い出してしまおうそうさ。

「どうしましょう。近くに他の店がありますからそこに行きましょうか……ところでこちらの方が例の？」

「そうです。こちら前原千恵さん」

前原さんは僕に挨拶をした。何度か書店で見た顔だ、レジを打ってもらったこともある。この人だったのか、と妙な感動を覚えた。僕の二つ上、今年短大に入学したらしい。

「よく店に来てらっしゃいますね」

前原さんも僕を覚えていたらしい。返事に困って、お世話になってます、とたぶんずれたことを言った。前原さんは笑ってくれた。

僕らは書店の敷地を出て別の喫茶店へ入った。久しぶりにメルのコーヒーを飲みたかったのだが。五百五十円は少し財布に厳しいが、味は決して悪くない。

喫茶店に入ると小気味良いジャズが耳に入る。有名な曲なのだろうか、音楽はよく判らない。座席が混んでいたのも、僕たちはカウンタに座ることにした。コーヒーを三人分注文する。

少し僕らのクラブの説明をして本題に入った。

「それで、例の五十円の話ですが」下田さんは二杯目のコーヒーに砂糖を入れる。「毎週土曜になると、その人は来るんですね」

「ええ、そうです」

前原さんは答える。

「正確に言うと、毎週土曜日の十時ごろですね。だいたいの前後になるとその人が来て、五十円を千円に両替していくんです。店の物には興味がないみたいで、買い物をしていったことはありません。まっすぐレジに来る

とそのまま帰ってしまうんです」

「それ、いつからなんですか」と僕。

前原さんは少し考えてから、

「そうですね……二か月くらい前からでしょうか。それからは毎週欠かさず」

「土曜日だけ、なんですか？ 他の日に来たことは」

「土曜日だけです。同僚にも聞いたので間違いありません」

「どんな人物でした？ 見覚えは？」これは下田さん。コーヒーを舐めながら質問をぶつける。

「ええと、どう言えばいいんでしょうね。なんだか怪しい人というか……たぶん男の人だとは思ってますけど。サングラスをしていて、髪には白い物がまじってました。けどなんだかそれがいかにも作り物っぽくって。たぶん鬘かつらだと思えます。手の癖なのか、ずっと車のキーを弄もっていました」

「鬘にサングラスねえ」

僕は続けて言う。

「あからさまに怪しいな。その五十円玉って偽物なんじゃないですか。マネーロンダリングってやつ」

「同じ店を何度も使うっていうのは考えにくい」

反論したのは下田さんで、前原さんも「そうですね。

それに偽造硬貨なんじゃないか、つてことは店でも一度話に挙がって、警察に確認してもらったんですけど、間違はなく本物だったそうですよ」

偽金の線はなしか、もとよりそれは予想していた。むしろ外れていて嬉しい。あまりにもこの説はありきたりだ。こうでなくは面白くない。

「次にすぐ思いつくのは……」下田さんが言う。

「前原さんが目当て、という可能性ですね。その人物は前原さんに好意を持っていて、なんとか接点を持ちたかった。それで奇妙な注文をして印象を残したかった」

「でも自分の印象を残したかった、という目的でわざと目立つ注文をしているのに、変装なんてするものでしょうか？ 行動がちぐはぐですよ」

というわけで、この説もあっけなく崩れた。喜ばしいことだ。

「さて、この二つが違うとなると……難しいですね」

いつのまにか下田さんは二杯目を飲み干していた。口を拭ぬぐって彼は続ける。

「考えられる目的をとりあえず分類してみましようか。

一、五十円玉を手放したかった場合

二、千円札が必要だった場合

三、対象の五十円玉を手放したかった場合

四、対象の千円札が必要だった場合

五、書店に五十円玉を渡したかった場合

六、書店から千円札を奪いたかった場合

七、書店に対象の五十円玉を渡したかった場合

八、書店から対象の千円札を奪いたかった場合

九、店員の注意を引きたかった場合

十、レジを塞いでおきたかった場合

今思いつくのは、とりあえずこんなところですか」

十番目は気がつかなかった、僕は素直に感心する。

下田さんは三杯目を頼もうか少し迷って、結局注文した。カフェイン中毒なのだろうか。僕も気をつけなければ。

「対象の、というのはどういうことですか？」

前原さんが尋ねる。

「その五十円や千円でなければいけなかったのか、という違いです。例えば偽造硬貨の洗浄ならば三の場合に含まれます」

納得したようだったので口を挟ませてもらおう。

「四番目と八番目は現実問題として難しいんじゃないで

すかね。引き渡される千円札がどれか犯人には予測がつかない。回収したい千円札があるなら他の方法で根こそぎ持っていくはずですよ」

犯人、という言い回しを使ったせいか前原さんは苦笑した。

「確かにそうですね。わたしが共犯ならば別でしょうけど、だったらそもそもこの集まりは実現しなかったはずですよ」

「二の場合にも疑問が出ますね、四番にも当てはまることですよ」

下田さんは言う。

「二、四の場合なぜ毎回五十円なのか、ということに説明が付きません。五百円でも百円でも良かったはず。にも関わらず、毎回五十円だけというのは納得がいきませんね」

下田さんは腕を組むと眼鏡を外して目頭を押さえた。

「九番目で思いつきがあるんですが」

僕は小さく手を挙げた。

「両替は陽動だった、という可能性です。有名なパターンですが」

「えっと、どういうことですか？」

「つまりですね、前原さんが両替している間他に注意が払えなくなります。その間に他のレジからお金をちよろまかすとか、レジの前の商品をポケットに入れるとか」「無理ですよ。その時間帯は殆どわたしがレジを担当しますが、他の人一人くらいはカウンタで作業をしていますから、私だけの注意を引いてももう一人に見つかるはずです」

「しかし見つかるか見つからないかは確率の話で——」

「犯人からすれば、そんな不確定な状況をわざわざトリックで作らないはず。更に欠点を挙げるなら、それも五十円である必然性がない。むしろもっと手間にかかるように調整して頼むはずですよ」

僕の悪あがきを下田さんが容赦なく打ち砕く。降参だ。「十番目の場合はどうでしょうか？」

肩が凝ったのか下田さんは首を回す。僕も背延びがしなくなった。まだ若いのに、どうにも肩こりが酷いのだ。「それでもどうでしょうか。両替のせいで特別レジが混んだ覚えはないです。塞いだからといって何も変わらないと思います」

これも却下。僕はもう種切れだった。

下田さんに目をやると、彼も同じらしく考え込んでし

まっていた。一度膠着するとなかなかアイディアは出ないものだ。

「一度張り込んで後を追ってみましょうか？」

とりあえず言ってみた。

「きみがやるの？」

と下田さん。彼には仕事があるので無理だろう。

「いやあ、実は僕もその時間帯はコンビニのバイトが。しばらくはどうしても休めないですね」

安い時給で休みの都合もなかなかつかないので、そろそろ辞めたいと思っている。

「あの、レジは監視カメラで見張られていますよね？」

「ええ、上の方から見下ろす形で設置されています」

「録画を見せていただく、というわけには……いきませんよね」

「それはちょっと」

前原さんは困惑した。まあそうだろう。

「たぶん無理でしょうね。警察から令状が出たわけでもないです。勝手に持ち出したら、わたしの首が飛びます」

「ですよね」

「監視カメラの映像が無理なら、自前のカメラでも問題

がありますか？」

下田さんが言う。前原さんは少し考えてから、

「どうでしょうか。録画を観せるよりはずっと大丈夫だとは思いますが……」

「あ、カメラなら僕が用意できますよ」

僕が後押しする。彼女は結局折れて見つからないように仕掛けましようと言った。

僕は一度家に戻ってビデオカメラを持ってきた。先月買ったばかりのもので、解像度が千九百二十×千八十のフルハイビジョン対応で内蔵HDDに九十分の連続録画が可能。五万円は手ごろな買い物だったと思う。

「高そうですね……壊さないか心配です」

「まあよほどのことがない限り大丈夫ですよ」

一通り録画のやり方を説明した。前原さんは割と飲み込みが早くて非常に助かった。

「レジカウンタの後ろに仕掛けようと思います」

「上に何か被せて見つからないようにした方がいいですよ」

下田さんは興味深げにカメラを見ながら言った。手にとって構えてみる。なかなか様になっていた。運動会のお父さんといった感じだ。

前原さんに予定が入っていたこともあり、カメラを託してこの集まりは解散になった。財布を出そうとした僕と前原さんを押しとどめて、下田さんが勘定を済ませた。まったく申し訳ない。

「会誌の企画ですけど、ちょっと趣旨を変えましょうか」

前原さんを見送ってから下田さんは言った。

「この謎をテーマとした競作という形ではなく、調査の顛末をそのまま小説化して掲載したら面白いと思いませんか？ 未解決になったら未解決で、探偵ルポという名目でエッセイにしてもいい」

「いいんじゃないですか」

僕は足をほぐしながら答えた。長時間じっとしていると体が痛くなる。もう夕暮れ時だった。空がすっかり赤くなっている。

「面白いと思いますよ。下田さん書いてみるといいですよ」

「いや、わたしはきみに頼もうと思うんですが」

え、と僕は聞き返す。丸投げですか。

「きみの地元だから必要になれば調査もしやすいし、わたしは他にも載せたいものがあるから」

「いや、それなら僕だって……ごめんなさい、ネタないです」

というわけで、今回の件は僕が責任持って結果をまとめることになった。やれやれ。

下田さんと別れて家路についた。安い作りの愛車に乗って約五分の行軍だ。ペダルに体重をかけながら、僕はふと疑問を持った。

——どうして五十枚じゃないんだ？

4

家に帰って僕はとりあえず部屋着に着替える。着古した青いジャージに腕を通すと不作法に横になる。

さて、前原さんから連絡があるのは早くて土曜日。丸一週間もある。それまでただ待っているのもなんなので、予備調査でもしておきたいところだ。といってもなにをすればよいのだろう。

しばらく考えて、近所の店を回り同じようなことが起きていないか聞き込みをしてくることにした。面倒だけれど着替え直してまた自転車を引き張り出す。慌ただしいことこの上ない。

とりあえず書店から半径二キロ程度の店を回ってみることにした。どうせ田舎なので店の数はさほど多くはないのだが、一軒一軒が離れているから少々手間だ。どうせ今日はもう暗くなるのだし、一週間のうちにのんびり回ろうと思った。

三日ほどかけて回った結果、周囲の飲食店や小売店、パチンコ屋などの娯楽施設等々すべてにおいて例の五十円男（女かもしれないが）は出していないことが判った。周辺の銀行の窓口に行ってみても答えは同じだった。やはりあの書店でなければいけない理由があるようだ。

四日も時間が余ってしまったが、その期間にとりあえず事件の概要と調査結果を書いた。下田さんに送ると、「進展に期待する」と返事が来た。

書き上げて気が大きくなっていたこともあり「おうよ任せとけ」と返事を作ってしまった。幸い送信エラーで向こうに届かなかったので助かった。危うく新しい黒歴史を作ってしまうところだった。若さ故の過ちというのは恐ろしい。

問題の土曜日になった。僕のバイトは午前中だけだった。帰ってからは落ち着きなく連絡を待っていた。夕方には仕事が終わると前原さんは言っていた。たぶんその

帰りにこちらに寄ってくれるだろう。いつもより濃いコーヒー^{あお}を呷り気を落ち着かせた。

前原さんがインターホンを鳴らしたのは午後五時過ぎ。うとうとしかけていた僕は慌てて飛び上がり玄関に駆けつけた。

「お仕事お疲れ様です。で、来ましたか？」

「来ました。いつもの時間にやって来て五十円玉を両替してくれって」

前原さんはハンドバックからカメラを取り出し僕に渡した。上がっていくように勧めたのだけれど、彼女はもうすぐ夕食だからと辞退した。僕は進展があれば連絡すると言って前原さんを見送った。

さあお待ちかねだ。僕は自室に帰るとパソコンにカメラを繋いだ。プレイヤを開いて再生させる。

誰かの手が写っていた。前原さんだろう。すぐに手は離れてレジの様子を映し出す。この書店のレジカウンタは南側の壁に面して、東西両方の入り口の中間の位置にある。上に少し写っているのは被せてある布か何かだろう。画面右下のデジタル時計によるとこのとき午前九時四十分。十時前後という話だったからそろそろ来てもいい頃だ。前原さんはレジを開けて小銭を整理していた。

ずっと背中を眺めていてもしょうがないので問題のシーンまで早送りにする。九時五十分頃の映像で早送りを止めた。画面右側から怪しい男が映り込んだからだ。

黒いサングラスをかけて白髪の交じった頭髪、たぶんこいつだろう。右手で鍵をいじっているのが見えた。

「すまないけど、これを両替してくれないか」

指向性マイクがうまく音を拾ってくれていた。声を作っているのか妙に聞き取りにくい発音だった。

「かしこまりました」

前原さんは答えると小銭を数え始める。残念ながら肝心の五十円玉はよく見えない。

二十秒ほどで数え終わって、前原さんは千円札を渡す。受け取ると、そいつは千円を乱暴にポケットに突っ込んだ。前原さんがレジに五十円を入れ一札すると、口をもごもご動かしてから左へフェイドアウトした。札を言ったのだろうか。

たった二分程度のやりとりだった。僕は巻き戻してもう一度観てみた。

よく見ると、録画はその後も続いていた。止め忘れたのか、前後の状況も写しておいた方が良く考えたのか。たぶん前者だろう。

一応残りのシーンも早回しで観てみることにした。あまり忙しくはないようで、前原さんの鑑賞会が続く。あまり妙なところを眺めないようにしているとレジにお客がやってきた。画面右からフェイドインした中年の男性は、青いジャージに身を包み漫画の単行本を差し出した。前原さんはそつなく会計を済ませた。なにもおかしいところはない。彼はそのまま右にフェイドアウトする。

またしばらくはなにも動きがなかったが、十時四十分頃になると女の子が右から映り込んできた。

あれ、この子見覚えがあるぞ。

黒い綺麗な髪を肩まで伸ばした彼女は、週刊誌を前原さんに渡した。財布から千円をとりだす。お釣りを受け取ると彼女は左にフェイドアウトした。別に不審な点はない。

そこから先でも何人かの客がレジで精算していた。買っていったのはどれもベストセラーの文庫本だった。

録画は十一時十分で止まっている。僕は女の子のシーンまで巻き戻した。

顔がよく写っている場面で映像を止めた。やはり見覚えがある。同じクラスの雨宮鈴あまみや りんだった。

時折話す程度の仲だが、この近所に住んでいるとは知

らなかった。勝手なイメージで市街地の方に住んでいるとばかり思っていたのだが。彼女が買っていたのは二冊の漫画雑誌だった。タイトルはよく見えなかった。

なにかが判りかけていた。

ともかく僕は動画を下田さんに送ることにした。そのままではサイズが大きすぎるので、エンコードして数十メガまで圧縮させる。解像度や画質をかなり落とすことになるが、観る分にはあまり支障はないはずだ。クアツドコアにここぞとばかり負荷をかけて三十分ほど仕上がった。メールに添付して下田さんに送信する。

もう一度両替のシーンを見直した。頭に浮かんだ発想を整理する。

たぶん、間違いない……と思う。ともかく確認を取ろうと思った。

前原さんに電話をかける。夕飯だと言っていたが、出してくれるだろうか。功を焦る性分なので今すぐに話したかった。

十回ほどコール音が鳴った後で前原さんが出た。

「二丁ですけど、今大丈夫ですか？」

「あ、二丁さん。別に構いませんよ」

僕は質問すべきことを脳内で整理しながら切り出した。

「録画を観ました。十時ちょっと前に来たのが問題の人ですね」

「そうです。いつもだいたいあの時間です」

「話に聞いたとおり変装しているようでしたが、毎回同じ人物だと言いつつ切れますか？」

「そうですね……それは間違いないと思います。声の感じも同じでしたし」

「判りました。もう一つ、彼はいつもまっすぐレジに向かってくるんですよ？」

はい、と前原さんはしつかり答える。

「その後はどうですか？　どこかの棚を見に行ったりする様子はありますか？」

「いえ、そのまままっすぐ帰られます。両替が済んだらもう用はないみたいです」

ここまでは予定調和。問題は次の質問だ。

「毎回、決まって録画の通りなんですか。例えば――」

前原さんは少し考えてから言った。

「そんなことはありませんでした。いつもあの録画の通りだったはずですよ」

心の中で喝采を上げた。気分はエラリークイーンだ。

僕は更に外堀を埋める。

「あの時間帯、店は混むんでしょうか」

「いえ、あまり。駐車場がいっぱいになることはまずないですね。午前中は特に少ないです。今日もそうでした。窓からちよと外を見ましたけど、三台ぐらい止まっていたくらいですよ」

「つまり、どこでも好きな場所に車を停められる状態だった、と考えていいわけですね？」

「そのはずですよ」

「判りました。ところで、あの店には自動販売機がありますよね？　たしか入り口のところに」

「二台あります。どちらも同じメーカーの」

「僕の記憶ではどちらも東の入り口に設置されていたと思うんですが」

「どちらもそこに設置されています。敷地の入り口に近い分あそこの方が人通りが多いですから」

「西にはなにも設置されていないんですね」

「はい」

「ちよとしたゲーム機のようなものもなかったはずですよ」

「そのはずですよ」

僕はなるべく興奮を抑えながら質問を続けた。

「証明写真の撮影機とか、その他諸々の設備も——」
「ありません。東口の自販機があるだけです。他にはなにも。設置してもたいした儲けにならないみたいで」
王手詰み。

一つ目の挑戦

この時点で、ある問題に関するすべての手がかりが提示されました。

“二十枚の五十円玉を千円札に両替している人物は誰か？”

フーダニットを解くことが全容の把握の近道となるでしょう。御随意に先へお進みください。

5

残り半分だ。僕は質問のベクトルを変えた。

「録画は問題の人物が帰った後も続いていた」

「あ、すみません。止めるのをすっかり忘れてて……」

前原さんは申し訳なさそうに謝った。特に謝られるようなことでもないのだが。

「いえ、特に問題ありませんからお気になさらず。女の子が雑誌を買いに来ていましたよね？ あの子はいつも来るんでしょうか」

そうです、と前原さん。

「なにか関係あるんですか？」

「いえ、そういうわけではなくて」と僕は嘘をついた。

「実はあの子、僕のクラスメイトなんですよ」

「え、そうなんですか」

慎重に聞き出さなければならなかった。頭を回転させて言葉を選ぶ。

「いつも土曜日のあの時間に？」

「^{ひいき}最良の雑誌の発売日みたいなんですよ。あの時間には店頭に並ぶのを知っているらしくていつもあの時間になると買いにきますから簡単に会えますよ」

なにか勘違いしたらしかったが、その方がやりやすい。幸運に感謝しながら先を続ける。

「彼女の買っていた雑誌って幾らですか。話題合わせに僕も読んでみたいと思うんですが」

「二つ合わせて六百五十円です。三百円が一冊と三百五十円が一冊」

前原さんが雑誌の名前を覚えてくれた。

知りたいことはだいたい判ったので、僕は礼を言って電話を切った。差し当たってできることは終わった。

雨宮に会わなければ、僕は彼女の整った顔を思い出す出るところが出たその体は黒いブレザーがよく似合っていた。成績優秀で性格も良好となればさぞかしもてることだろう。そういうえば、大人びた雰囲気や体つきが前原さんに似てなくもない。彼女に確認しなければいけないことがあった。随分前に聞いたことなのであまり自信がなかったからだ。

僕の考えが当たっていたら、会誌に原稿を載せるつもりはなかった。下田さんには適当に言いつくろって昔書いた使い回しを渡そう。もちろん前原さんにも答えを教えるつもりはない。

うまく立ち回らなければ。

僕はほくそ笑んだ。

6

月曜日は分厚い雲が覆っていて朝からずっと薄暗かった。湿度が高くて過ごしにくい。その日最後の講義が終わる頃になると雷がなりだした。雷鳴に急かされながら

僕は彼女の姿を探した。

彼女は自分の席でのんびり教科書を片付けていた。確か帰宅部だったはずなので、声をかけるチャンスはあるはずだ。できれば人に見られたくはなかった。

しばらく遠巻きに監視していると彼女は席を立って教室を出た。鞆を置いたままだから、十中八九行き先は購買部だろう。僕は先回りした。

購買部自体はもう閉まっているのだが、横に設置してある自動販売機はまだ動いている。

僕は自販機の前で財布を取り出して雨宮を待った。言うべきセリフを頭で確認する。一分もしないうちに彼女はやって来た。

僕は声をかけた。

「あの、悪いんだけど小銭を貸してもらえないかな」

俯いていた雨宮はこちらを見た。ちよつと驚いたようだったので、不自然だったか、と不安になった。

「財布にお金を入れ忘れててさ。五十円しか入っていないんだよ。十円貸してもらえればコーヒーが買えるんだけど」

「貸すのはいいんだけど、いつも細かいお金は持ち歩かないの」

ああ、そんなこと前に言ってたね、と相づちを打つ。親切にも彼女は僕に奢^もってくれた。僕はありがたく御馳走になった。味が薄くて熱湯を飲んでいろいろだった。

——これだから安いコーヒーは。

「メル」って喫茶店知ってる？」僕はそれとなく水を向ける。「本屋の横にあるんだけど」

「あそこなら良く行く。雑誌を買って、あそこでコーヒーを読むのが好きだから」

へえ、と大げさに驚いてみせる。

「店のおじさんも面白いしね。それがどうかした？」

「いや別に。コーヒーありがとうね」

バイトだから、と取り繕って彼女と別れた。バイトがあるのは本当だったのでちよつと憂鬱だった。

電車で一時間ほど揺られてそのまま職場へ直行した。まずいことに強風で電車が少し遅れた。ついてない。駅に着くと雷に追い立てられながら職場へ急いだ。けれどまあ、これももう少しの辛抱だと思つと少しは気が紛れる。

客の理不尽なクレームを躲^かしながらなんとか勤め上げると、もしかしたら辞めさせてもらふことになるかもしれない、と上司に伝えた。

雨宮に会ったことで、僕は確証を持っていた。家に帰り着くと、とりあえず下田さんに送るメールを作った。例の件ですが、どうにも行き詰まりそうです。もうしばらく頑張ってみますが、原稿にするのは難しいと思います。それとは別に書きたいネタが浮かんだったので、そちらに変更してもいいですか？

不自然かな、と思ひ一度手を止める。あまりにも諦めが早すぎるように見えた。もう少し間を置いて伝えた方がいいか。まあ、それはそれで考えるとして――

僕は電話帳で中川さんの電話番号を調べた。今の時間はメルにはいないだろう。深呼吸をして心を落ち着けてから電話をかける。幸いすぐに繋がった。

「はい、中川ですが」

「あ、遅くにすみません。中川庄一さんですよ。メルって喫茶店を経営されている」

「はあ、まあそうですけど」

明らかに不審がついていた。僕は大きく間を取って演出効果を狙ってみた。

「――五十円玉の件で、ちよつとこれから話したいことがあるんですが。もちろん会っていただけますよね」
気まずい沈黙が続いた。

「なにが、目的ですか……」

「別に、まあとりあえず話をしましょうよ。どうしても嫌だと言うならそれでも結構ですけど」

彼は掠れた声で、今から店に来てください、と言った。

二つ目の挑戦

以上ですべての手がかりが記されました。

「なぜ二十枚の五十円玉が千円札に両替されたか？」

よろしければその理由を「推察」してください。

では、御随意に先へお進みください

7

メルの前に自転車を止めた。夜になるとぐっと気温が下がり息が白くなる。年々秋が短くなっている気がした。まあ夏が長くなるよりは幾らか良いか。

扉にかけられた看板は「CLOSE」となっていたが店には明かりが点いている。鍵はかかっていなかったもので、僕はそのまま中に入った。

店内は緩く暖房が効いていた。僕は着古した上着を衣

紋掛けにかけた。明日服屋に行ってみようか。たまにはちよつと高い服も着てみよう。

中川さんはカウンタの向こうにいた。磨くマグカップもないので所在なさ気だ。ベルが鳴ったので僕には気がついてはいるはずだが「いらつしやい」の一言もない。

まあいいか。

僕は中川さんの前に座った。

「コーヒー、淹れてもらえませんか」

黙って彼は後ろを向くと薬缶に火をかけた。

「きみは、何度か見た顔だね」

コーヒーマーカをセットしながら彼は言う。僕はここに笑いながら答えた。

「そうですね。最近あまり顔を出してませんでした。このコーヒー、結構気に入ってます」

そりやどうも、彼は感情を込めずに言った。嬉しそうには見えない。まあそうだろう。

コーヒーが入るにはまだ時間がかかりそうだったので、僕は話を切り出すことにした。

「実はですね、一昨日のあなたの行動を見せていただきました。レジの後ろにカメラを仕掛けていたんです。というのも前原さん——あなたの対応をしていた店員さん

から話を伺って興味を持ったものでして。直接張り込めれば良かったんですが、あいにく時間が取れずにそうやって実際の現場を見たわけです」

お湯が沸いたらしい。中川さんは火を止めてお湯を機械に注いだ。

「それで？」

「伺っていた通り、土曜日の十時頃不審な人物が現れて五十円玉を二十枚、千円札に替えていきました。まあいったん奇妙な両替自体は脇に置いておくとして。それ以外のある行動が僕の目を引きました。彼は画面右から現れて、両替を終えると左から出ていきました。これ、よく考えてみるとおかしいことなんです」

中川さんはちよつと考え込んだ。

「どうして？ 別に大したことじゃなさそうだけど」

「手の癖なのか、その人物は車の鍵を弄んでいました。つまり車で来ていたんです。これはいいですか？」

マグカップにできたコーヒーを注ぎながら、中川さんは頷く。

「それに加えて、前原さんによるとその人物は店の物には興味を示さなかったらしい。入って来るなりまっすぐレジに来て両替を済ませ、そのまま帰って行くそうです。

なのにその人物は右から来て左へ消えた。カメラはカウンタの中に設置していましたが東から現れて西へ消えたことになりました」

ブラックのまま口に含んだ。悪くない、決して悪くない。やはりコーヒーはこうでないと。

「別におかしい気がするが。あの書店は入り口が二つある」

「いいえ、おかしいんです。なぜなら車で来ていましたから。彼の行動を整理するとうなります。まず車を敷地に乗入れる、そして東口から入店する。そして両替を済ませ西口から外へ出る。そして車に乗って帰った」

「なにか問題が？」

問題です、と僕は強調していった。

「本来そんな流れにはならないんですよ。彼はまず東口から店内に入りました。その理由としては二つ考えられます。

一、車から近かったから

二、なんらかの理由で東口から入らなければならなかったから

一の場合は、まあ説明しなくてもお判りいただけるでしょうが、一応説明しておきましょう。この場合彼の行

動はおかしなことになります。わざわざ車から遠い西口から外に出ていることになるからです。一が真の場合、彼は画面右から現れて右に消えなければならぬ」

中川さんは自分の分のマグカップも用意してコーヒを注いでいた。香りを嗅ぎながらカウンタを出て僕の横に座った。

「——そうだね。きみの言うとおりだ」

「では二の場合はどうか、これも現実の行動と矛盾します。あの時間帯、駐車場は殆ど空いています。録画を撮った日前原さんは窓から外を見たそうですが、二、三台停まっているだけだったそうです。駐車場はどこでも好きなところに駐車できる状態にあった。だから東から入らなければいけない事情があるのなら、車は東口の近くに駐車されたはずです。だからこの場合も画面右から現れ右に消えなければならぬ。けれども実際は左へ消えた」

一つ一つ話を飲み込んでから彼は頷いた。

「まあ、きみの話は一応筋が通っていると思う。では結局どういうことになるのかな」

「東口から入店した理由は特定するのは意味がない、ということですよ。考えるべきは、なぜ西口から出ていった

か」になります。ではこの場合はどうなるのか。先ほどの一理由はなりたちません。東から入った以上どの場合でも車に近いのは東口だからです」

彼は相づちを打つ。コーヒを舐めてから僕は続ける。

「彼は、西口から出る合理的な理由」を持っていた。では東口と西口ではなにが違うのか」

「飲み物でも買ったかったんじゃないか。自販機があるだろう」

「自販機があるのは東口だけです。西口にはありませんでした。彼は東口になくて西口にあるものに用があったはずですよ。それはなにか」

溜息をついて、中川さんは言った。

「この店か——」

「東になくて西にあるのはメルだけです。西側では敷地に入入りできませんから、他のところに行つたと考えることもできません。彼は両替をした後この店に向かった。それは公理。ここまでは認めていただけますか？」

「認めよう。大したもんだ」

コーヒを呷って彼は先を促す。

「で、続きは」

「——自分で言っておきながらなんですが、この公理は

また状況と矛盾するように見えます。メルの営業時間は午前十時半から午後七時。彼が向かった時にはまだ開店していません」

「営業時間を知らなかったのかな」

「違います」

僕は深呼吸してから答えた。

「なぜなら彼の行動は初めてではないから。毎回録画の通りに彼が行動したことは前原さんが証言してくれています。彼は以前にも両替の後メルに向かっていた。知らないはずはありません。詰めです。彼は営業時間に関わらず店に来ることができた人物、つまりこの店の店員です。そしてそれは中川さんだけ。したがって両替をしていたのは中川さんです」

口に出すのは流石に気恥ずかしいので、心の中でだけQEDと呟いた。

「なるほどね」

おかわり飲むかい、彼は言った。マグカップの中身は殆どなくなっていた。お言葉に甘えよう。

カウンタに戻ると中川さんはまたお湯を沸かし直した。

「それで今の話、認めていただけますか」

「そうだね、あいにく気の利いた反論は思いつかない。」

認めるしかないね。だけどさ——」

彼はこちらを向いた。

「だからなんなの？ 認めるよ。俺は自分だと気づかれないよう変装をして、五十円玉を千円札に替えてもらっていた。きみの論証は肯定する。それがどうしたんだ？ 別にいいじゃないか。好きにさせてくれよ」

「まあ本当にやましいところがないのなら、こんな時間に会ってくれてはいませんよね」

「どうかな」

さて、後半だ。

「では次はあなたの動機について僕の『推察』を話しましょう。まず一番簡単な答えは千円札が欲しかったからですがこれは却下です。二十枚の五十円玉にこだわる必然性がなくなります。他の硬貨が一枚も混じっていないというのは異常です。従ってあなたの狙いは、千円札ではなく五十円玉を手放すことにあった。僕が疑問に思ったのはなぜ二十枚なのか、ということですよ」

「千円札がほしいから、ではないね。さっきの話と矛盾する。『二十枚の五十円玉』に意味があるわけだ」

言いながら中川さんはおかわりを出してくれた。もちろんブラックでいただく。

「二十枚というと、とても多いように思えますが、実は違います。硬貨は一パッケージ五十枚ですからかなり中途半端な数なんです。手放す数は、五十枚では多過ぎて一枚では少な過ぎた。だから二十枚——というのが僕の仮説です。まずなぜ多すぎてはいけないのか——」

僕はカウンタのレジを指さした。

「あれです。レジにとって五十枚の硬貨は多すぎる」

「そうかい？ 普通硬貨を補充するときは一パッケージを空けると思うけど」

「それは空に近い場合です。あなたが両替に行ったときにレジの中身がどのような状況か判りません。五十枚入ってちょうど良い、というのは補充するときですから、都合良くそうなっている蓋然性はかなり低い。だから五十枚では多すぎた。多すぎるとレジには入れられず、所定の別の場所に入れられてしまう。あなたは五十円玉をできるだけ多く書店のレジに収めさせたかった」

「……その理由も説明してくれるんだろうね」

もちろんです、と答えて僕は続けた。

「レジに入った場合と入らなかった場合の違いはなにか。レジになればその硬貨は釣り銭として使われません。」

一応、レジの五十円玉が減れば使われる可能性はありま

すが、新しいパッケージを空けるのが普通ですからあまり期待はできないでしょう。少なすぎては使われる確率が下がるので、そのバランスを考えた数が二十枚なんじゃないですか。自分が持ち込んだ五十円玉を釣り銭として使わせたかった、これはすなわち店に来る他の客に渡したかったということです。あの書店でだけ両替をしていた理由もここにあります。毎週土曜日に書店を訪れる特定の人物に五十円玉を渡したかったからだ。それも本人に気づかれずに」

中川さんは僕の隣に戻ってきた。自分はもういいのか、マグカップは持っていない。

「——誰に？」

「なぜ五十円玉なのかを考えれば特定できます。その人物は確実に五十円玉をお釣りとして受け取るからです。つまり毎回買う物が決まっていた人物です。なおかつどのように金を払うかも決まっていました。そうでなければ五十円玉を受け取るという予想は立てられません。更にあなたが両替を行ってからあまり時間をおかずに訪れる、という条件も加えることができるでしょう。時間が経つとあなたが渡した分がなくなる可能性が出てきますから。それに該当する人物を一人知っています。雨宮鈴

です。実は僕、彼女のクラスメイトなんですよ」

彼の顔が少し引きつった。

「雨宮は決まって毎週土曜日に二冊の漫画雑誌を購入していました。二冊合わせて六百五十円です。おまけに彼女は日頃小銭を持ち歩いていませんでした。したがって毎週土曜日のあの時間帯に、雨宮が百円玉三枚と五十円玉一枚を受け取ることは、彼女と多少親しい人物ならば予想できることです。彼女はここの常連だったそうですね。あなたは両替を通して雨宮に五十円玉を渡していたんだ。ではその目的ですが――」

「待ってくれ、えええときみは……」

二丁です、と僕は答えた。そういえば名乗っていないかった。

「二丁くん、もう……勘弁してくれないか。そこから先は……取引には応じるから」

ここまで来て、なに言ってるやがる。

「一つ引つかかる問題が出てきます。雨宮は五十円玉だけではなく百円玉も受け取ります。その期待値は同じ。

ではつり銭として渡る確率が低くなるにも関わらず、なぜ百円ではなく五十円だけなのか。そこからあなたの目的を推察することができます。このコーヒー、確か一

杯五百五十円ですよね」

僕は残りを飲み干した。

「彼女は雑誌を買って、ここでコーヒーを飲むのが好きだと言っていました。雑誌を購入した後彼女は五百五十円の買い物をするわけです。先ほども言いましたが雨宮は小銭を身につけない主義でした。使える小銭は使いきろうとするでしょう。つまり支払に毎回千円以上の紙幣と五十円玉を使っているはずです。一度渡した五十円玉があなたに戻ってくることはありません。だから百円玉は両替に使われなかった。百円玉は三枚しか手元にはいはずですから、あなたの手元に戻ってこない、だから五十円玉だけでなければいけなかった。

あなたは一度書店のレジに硬貨を入れさせ、なおかつそれを回収しなかった。あなたが両替を行った、いわば犯人であることが裏付けと言えるでしょう。

ではそうして戻ってきた硬貨と普通の硬貨の差はなんなのか。基本的にはなんにも変わりません。レジを通して戻ってきたこと以外はね。だからその一連の現象の中にあなたが硬貨に加えたい属性があったはずですよ。具体的に挙げると、

一、レジを受け持つ店員、前原さんが手を触れた。

二、雨宮鈴が手を触れた。

このどちらかの事実が欲しかったわけです。結論から言うと後者は否定されます。

後者が真の場合、説明したような手順を踏んで五十円玉を回収する必要はありません。彼女は放っておいても店に来てコーヒーを飲んでいくのですから、なにもしなくても手を触れたという属性を持つ物が手に入ります。前原さんが手に触れた物が欲しかったんでしょ？」

息継ぎをした。

「まだ終わりませんよ。それだけならば、この場合もこんなややこしいことはしないでいいはずです。なにか買い物をすれば、購入した本やお釣りに属性が付加されるからです。とすると、先ほど否定した後者の条件と対等であり、どちらにおいても行為の必然性が消失するように思えます。けれども事実として起きている以上それは誤り、これは前提。これまでの推論からどちらかは肯定されなければならない。

一連の行為に必然性があるパターン、それは事前に準備しておいた物体に手を触れさせたかった場合です。

後者ならば仕掛けをマグカップなどに行うことができますが、前者ではなかなか難しい。極普通に起こりうる

現象（買い物など）の結果、前原さんからあなたへ物が渡る場合は、あらかじめ書店にあった物しか中川さんの手に渡りません。よって前者は生き残ることができる。ではその仕掛けとはなにか？

中川さん、あの五十円玉に色々と「いたずら」しておいたんじゃないませんか？」

中川さんは大きく息を吐いて額に手を当てた。脂汗が滲んでいる。

「まとめましょう。あなたが五十円玉を二十枚両替したのは、そうすれば前原さんに「いたずら」した物体を触れさせることができ、それを回収してあなたの欲求を満たすことができるから。僕の推察は以上です」

彼は立ち上がるとカウンタに入ってレジを開けた。

「……幾ら欲しいんだ」

「別に無茶な要求はしませんから、安心してください」

僕は彼に微笑みかけた。

「実は、バイトを辞めようと思ってるんです。待遇は悪いし、時間の都合はつかないし。その分の損失を補填してくれるだけで結構です。月三万つてところですか。僕が今の学校を卒業するまでで結構、締めて六十万程度ですね。良心的でしょう？」

僕はふと、前原さんの肉感的な体を思い浮かべた。雨宮に劣らず、彼女もまた魅力的な女性だった。

「——それと、僕を店に置いてくれませんか？ 週一回、土曜の午前中だけ。レジ打ちなら、任せておいてください。最後にもうひとつ、あの変装用具、僕に貸してくださいませんか？」



エアミス研ってなんだ!!

タイガー田中

エアミス研とはなにか!

それはズバリ「どうしてこうなった」だ!

いきなりなんのことやらで申し訳ないが、しかしこれほどエアミス研の本質をついた言葉もないのではないか。今回、ボクはこのエッセイを書くにあたり『エアミス研とはなにか』をテーマに決めた。そして執筆の参考として他の会員から意見を聞いてみた。

多かったのは「放課後のゆるい部活・サークル活動」

「ミステリの勉強の場」といった意見だ。これは実にわかりやすい。ボク自身エアミス研をそのように捉えている。おそらく他の方々にとっても同じ、共通基本の認識だと思う。

だがそれらの意見を押しつけて、一気にボクの心に飛びこんできたのが、冒頭の言葉だ。

つまり——エアミス研とは「どうしてこうなった」。

「ゆるいサークル活動」「勉強の場」といった方向を目指すしつつも、結果的にエアミス研は「どうして(だからこそ?)こうなった」という集団となった。

思えば、エアミス研ができていろいろあった。ここでボクはその過去を振り返ってみたいと思う。

*

突然だが、エアミス研はどのようにしてできたのだろう。

エアミス研wikiを見ると「ツイッター上に自然発生した」と説明されているが、これではなんのことやらわからない。

特に最近入会された方には、設立当時のことを実感してもらいにくい点があると思う。そういった方の参考になると思われる当時のことをいくつか思い出して、それを書いてみよう。

前もって断っておきたいのは、以下に書くことはあくまでもボクから見たエアミス研・ミステリクラスタの動きということだ。人によって見える光景もまったく違うのがツイッターである。以下はあくまでもボクの主観に基づくものであることを承知した上でお読みいただきたい。

さてエアミス研が誕生したことには、いくつかの要因

が考えられる。それはなにか？　ボクの考えでは、次の三つの要因が重要だった。

1 【ツイッターの流行】

まずなんといってもこれが重要だろう。ツイッターは社会現象になった。流行っているものにこそ人は集まる。さまざまな人がツイッターを始め、その中にいわゆるミステリクラスタ（読者だけでなく、作家、評論家、編集者含む）と呼ばれる人種がいた。

2 【大学のミス研の存在】

ツイッターにはミス研に所属している方も多い。これらのミス研の方々の存在は無視できないところでないか。各ミス研の方々の交流が中心となって一種の磁場を形成して、そこに他のミステリファンが自然と引き寄せられていった……ような気がする。

3 【トウギャッターによるミステリTLのまとめ】

かくしてツイッター上に、目には見えない、ミステリクラスタが形成される。

そしてこの本来不可視のものであるミステリクラスタ

を可視化させたのがトウギャッターである。

ミステリクラスタの交流が活発化することにより、ここに自然とミステリTLが形成される。

そのTLのまとめがつくられ、これにより議論の全体を把握できるようになる。自分が見ていたTLが議論の全体の一部でしかなかったことにそこで気づくわけだ。まとめを介して、他のミステリクラスタを知るきっかけとなるのだ。

この「ミステリTLの形成」↓「まとめの作成」というサイクルが繰り返されることにより、ミステリクラスタの結びつきが強化されてゆく。そしてますますミステリTLの活性化に繋がるわけだ。

この三つがうまく反応し、エアミス研が誕生する素地をつくりあげた、とボクは思っている。

ツイッターを始めたころの自分を振り返ってみると、ボクはせっせとミステリファンをフォローすることに励んでいた。できればミステリに関したくさんつぶやいている方をフォローしたい。しかしプロフィール等からでは判断しかねる場合が多くて「どうしたらミステリファ

ンを効率よくフォローできるか」と悩んでいた。

それでも少しづつフォローを増やしていったある頃、次第にミステリTLというものを体験するようになった。

目の前の話題に反応し、何の気なしに自分の思ったことをつぶやく。その話題のまとめがつけられる。そしてまとめに目を通してみると、なんと自分のつぶやきが入っている。このときはびっくりした。今みたいに他の方に存在を知られているわけじゃなし、自分はミステリクラスタの蚊帳の外、と思っていた。

こういうことがあって以来、ミステリの話題になったときは、積極的につぶやくようになった。自分のつぶやきがトゥギャッターにまとめられる。この頃はむしろそのこと自体を楽しんでいた。

そしてまとめに目を通し、気になる意見をつぶやいている人は、どんどんフォローしていった。すると結構な割合で向こうもフォロー返しをしてくれた。こうすれば効率よくミステリファンをフォローできることに気づいた。そうやっていくとどんどんツイッターが楽しくなってきた。

ミステリTL自体も日に日に力づくよく活発化していったように感じられた。

*

そしていよいよ「ミス研TL」が発生する。

これに関してはエアミス研wikiにある「エアミス研創立の経緯」を見ていただければ具体的にわかるだろう。

いま思い返してもあのときの熱気はすごかった。目の前でアレヨアレヨという間にさまざまなことが決まっていた。

「エアミス研研究会」という名称、リスト、ハッシュタグ、入会宣言、次々と押し寄せる入会希望者。あのときの出来事はまるで夢のようだった。

なんというか「世の中にはこんなにミステリファンがいたのか!？」とビックリしてしまった。とにかく「これからなにをやるのか」という期待感に満ちていた時期だったと思う。

たとえばハッシュタグをつけての意見の共有、そこから「ミステリ勝手に最終回」「あのキャラが絶対いわないこと」等の突発企画、別タグを使用しているミステリしりとり。そして読書会。エアミス研wikiのまとめもずいぶん増えた。

そうだ、エロミス研も忘れてはならない。エアミス研という名称が決まり、いちばん得したのは実はエロミスファンかもしれない。たまたま一字違いというだけで、エロミス研もほぼ同時に発足してしまった。もしかしたらエアミス研でいちばん活動したのではないか（笑）。エアミス研ランキングが盛り上がったのも記憶に新しい。

リアルタイムで次々TLに発表される順位……ミステリを読んでこんな興奮が得られる日がくるなんて思いもしなかった。麻里邑圭人さんあのかきはありがとうございます。

エアミス研のオフ会も行われた。そして今回とうとう同人誌をつくることにまでなった。ツイッターを飛び越えての活動だ。

エアミス研ができてから、まだ半年。それでここまで来るとは正直思ってた。

ボクにとってこんなうれしい話はない。

*

エアミス研はどうしてこうなったのか。それは正直ボ

クにはわからない。

ただエアミス研がなんなのかと聞かれたら、それはやはり「放課後のゆるい部活」なんだと答えよう。

外部には「エアミス研ってなんなの？ なにがしたいの？」と思っている人もいるかもしれない。それには

「面白いことがしたいんだ」とボクは答えよう。

この「ゆるい放課後」の雰囲気を楽しむボクにとって、ただこれができるだけ長くつづけばいいと思う。

今回の同人誌がまた、さらに面白いことに繋がるきっかけになればいいなと願いつつ、これで話を終わる。

最後に、今回ツイッター上でボクの質問に答えてくださった方々、ありがとうございます。特に「どうしてこうなった」という回答をいただいた羊毛亭さんには最大級の感謝を。そして琉花さんとぷかさんからは、とても丁寧な答えをいただいたにも関わらず、まったく生かすことができませんでした。謹んでお詫び申し上げます。

ごめんなさい。

サクラサクミライ

麻里邑圭人
まりむらけいと

6

夕焼け色に沈んだ体育館の裏手。築四〇年は余裕で経っていると思われる、古びた漆喰の壁には、二つの長い影法師が映し出されている。

一つはボクだ。ひよろりともやしみたいないな体型は影絵になっても全く変わらない。むしろシンプルになった分、余計貧弱さが目立ってしまい、いつも以上に惨めな気分になる。

それでもう一人は――

「こんな所に呼び出したりして、一体何の用かな？ マコピ―」

凜としたメゾソプラノの響きの中に、少しばかり戸惑いを滲ませた彼女の声が、しんと静まり返った辺りの空気を震わせた。

それまで地面に視線を落としていたボクは、彼女の声

が聞こえたのを合図にゆっくりと顔を上げる。

ボクの見つめた視線の先――そこには、一人の少女が真っ赤な夕日を背にして立っていた。

少しウェーブがかった栗色の長い髪。日本人離れた、手足の長いすらりとした体躯。抜けるように白い肌。大顔のボクからしてみれば、びっくりするような小さな顔。その顔の中にある、つぶらな瞳には声同様、戸惑いの色が浮かんでいたけれど、それは少しも彼女の魅力をそこねていない。

多分、彼女のことを美少女と呼んだとしても、誰も異論は挟まないだろう。まるで映画の中から抜け出してきたような、眩しすぎる存在。だからこそ、気になるところもある。それは、彼女が今着ている制服のデザインについてだ。

はつきり言って、彼女にはまるで似合っていない。というか、それ以前に地味すぎる。何て言うか、どれもこれも無難にまとまってしまった感じで、これと言った際立った特徴がないのだ。一言でいうなら、没個性。それが、戸惑いの感情よりもよっぽど彼女の魅力にケチをつ

けてるような感じがして、ボクとしては不愉快でならなかった。

勿論、彼女には何の責任もない。責任があるとすれば、こんなセンスのかけらもない制服を推奨している学校側の方だ。多分、学校側の意図としては学業に専念してもらうため、浮ついたデザインは避けたかったといったところなのだろうが、それを押し付けられる生徒側からしてみればたまったものではない。特に男子の制服に至っては、女子以上に没個性がいき過ぎたあまり、すぐ隣にあるY**高校の制服と見分けがつかないという悲惨なことになっている。それはさすがにあんまりだということとで、噂では近々有志が集まって学校側に直訴するとかしないとか（ちなみにY**高校とは制服のデザイン以外にも、入学式や卒業式、文化祭や体育祭の日取りなども被っている。ていうか、ここまで被るもはやただの偶然では済まされない気が）。

（……それはともかく）

ボクは脱線しかかっている思考を軌道修正すると、一度大きく深呼吸した。そうすることによって早鐘のように鳴り続ける心臓の鼓動がおさまるとは到底思えなかったが、それでも何もしないよりはマシだ。

彼女とはもう何度も言葉を交わしているはずなのに、未だ彼女の前に立つと緊張せずにはいられない。それが恋というものだからと言ってしまうばそれまでだけれど、少しでも気を抜けば、へなへなとその場に座り込んでしまうに違いない。

「ええと……その……」

頑張れオレ。しっかりしろオレ。

緊張のあまり、熱にうかされたようにぼうつとする頭の中から、辛うじて言うべき言葉を捻くり出す。たとえ他の言葉は忘れても、これだけは伝えなければならない。

「実は——」

だが、言いかけたのも束の間、それもすぐに心配げな彼女の声に掻き消されてしまう。「うわっ、どうしたの、その顔？」

「え？」

「なんかマコピ、顔がすごい真っ青だよ。もしかして、どこか具合でも悪いの？」

「い、いや、そんなことはないけど？　ちょっと寝不足なだけで」

「でも、それにしたって顔色悪すぎだよ？　やつぱり熱でもあるんじゃない？　なんだったら、一緒に保健室で

も」

「ホント、大丈夫だから。それより——」

こんな調子ではいつまで経っても話が進まない。ボクは心の中で彼女に謝ると、強引に言葉をねじ込んだ。

「……今日、来栖^{くるす}さんをここへ呼び出したのは他でもない、ボクの話聞いてもらいたかったからなんだ。……あ、でも、別にそんなややこしい話じゃなくて、むしろ話としてはシンプル過ぎるというか、ぶっちゃけ、それに対する来栖さんの答えもイエスカノーかの二択でも構わないとすら思ってるんだけど……」

我ながら要領を得ない、ひどい説明だと思うが、授業中必死に考えた折角^{せうかく}の段取りが今やきれいさっぱり頭の中から消し飛んでしまっているのだから仕方がない。

（なるようになれ！）

ボクは、制服のポケットの中に入っているカズキがくれた『お守り』をぎゅっと握りしめると、ずっと胸に秘めていたその言葉を思い切って口にした。

「実は今まで黙っていたけどオレ、ずっと来栖さんのこととが——」

1

こつん、と背中を小突かれたところで、ボクははっと我に返った。思わず振り返ると、そこには苦笑を浮かべたカズキの顔がある。

何か用？ そう目で問い掛けたボクに、カズキが小声で言った。

「一三ページの三行目——次、お前の番だぜ」

そこでボクは、ようやく今が英語の授業中であることを思い出す。

慌てて前へ向き直ろうとするボクに向かって、カズキが続けて「お前、また来栖に見とれてただろ？」

「……」

「青春してるねえ」

そう、しみじみとした口調で言うカズキに対し、余計なお世話だと反論しかけたところで——今度はボクを呼ぶ教師の声がそれを遮^{さへぎ}った。

*

やがて授業が終わり昼休みに入ると、ボクはすぐさま

椅子を一八〇度回転させてカズキと向かい合った。

「——おい」

「何か？」

「……さつきは助かったよ、ありがとう」

「どういたしまして」

「それはそうと」

ボクはカズキの顔をじろりと睨むと「ひどいじゃないか。授業中にいきなりあんなこと言うなんて」

「ひどいものにも事実だろ」

対するカズキはといえば、いたって飄々としている。

「オレは一切嘘は言っていない」

「それにしたって、あんな場面で冷やかすことないじゃないか」

「冷やかしじゃないさ」

「え？」

「こんなことをオレが言うとは冗談にしか聞こえないかもしれないが、オレは本心からお前のことを羨ましいと思ってる。なんてったって片思いだぞ、片思い。片思いと言ったら、それこそ青春の代名詞じゃないか。……ああ、できることならオレもそんな真つ当な青春を送ってみたいよ」

「真つ当な青春って——」

藪から棒に何を言い出すんだ、こいつは。「そんなの、送ろうと思えば今からでも全然間に合うじゃないか」

「いいや、もう手遅れだね」

だが、カズキはきつぱりと首を横に振ると、恨めしげな視線をボクに向けて「お忘れかもしれないが、オレはこの学校において一番の厄介者なんだぜ？ 争いの火種しか蒔かないオレのような人間のどこに真つ当な青春を送れる素質があるの？ やめてくれよ。それこそ皮肉にしか聞こえない」

「……あ」

そうだった。あまりにも身近な存在過ぎて忘れていたけれど、何を隠そうカズキはこの学校にいる不良たちのリーダー的存在——所謂『番長』というやつなのである。本人いわく、「誰彼構わず喧嘩を吹っ掛けていたら、いつの間にかそうなっていた」のだそうだが、それが果たして名誉なことなのかどうかは不良でないボクにはまるで分からない。ただ番長ともなると他校の不良たちから喧嘩を売られる確率も半端ではないみたいで、一時期はカズキが歩けば喧嘩に当たると言う噂がまことしやかに校内で囁かれたほどだ。

だが、カズキの凄いののはそれだけではない。なんと、今のところ売られた喧嘩には全て勝利を収めているらしい。あくまでこちらからは先に手出しはしない、降りかかる火の粉を払いのけただけとカズキは言うが、言うは易き行うは難きである。外見を見る限りでは、カズキはお世辞にも喧嘩が強そうだとは言いがたい。どちらかと言えば、ボクと同じもやし体形という時点でほぼやられキヤラ確定なのだが、にも関わらず全戦全勝、向かうところ敵なしなのだから、不思議なことこの上ない。

カズキいわく、喧嘩の勝敗に体格や力の差は関係ないとのことだが、だったらその強さの秘訣がどこにあるのか、今度折りを見て聞いてみたいと思う。

それはともかくとして——確かにカズキの言う通り、そんな状況ではとても真つ当な青春（恋愛）は望めないだろう。

「だったら今すぐ不良なんてやめちゃえばいいのに」

とボクが言っていると、そうもいかないのさとカズキは肩をすくめて

「ただの不良ならともかく、オレみたい立場になると、それなりにしがらみも多くてな」

しがらみ、ねえ。

「そういうもんかねえ」

「そういうもんなんだよ」

カズキはそう言つて深々と溜め息をついてから——ふと、何を思ったか思わせ振りの笑みを浮かべると「まあオレの話はこれくらいにするとして、今は自分のことを心配した方がいいと思うぜ」

「へ？　どういう意味だよ、それ？」

「——今、お取り込み中かしら？」

不意に、背後から声が聞こえた。

驚いて、振り返る。

するとそこには、なんと彼女が——来栖ミヤコが、プリントの束を手にして立っていた。

2

噂をすればなんとやらとは言うけれど、今の状況を例えるとすると、正しくそんな感じだろう。

（ど、どうして彼女がここに……？）

あまりの出来事に、ボクの頭の中は一瞬にして真っ白

になつてしまった。というか、すっかりまいあがつてしまったと言つた方が正しい。それまでカズキ相手に話していた時とは比較にならないくらい心拍数が跳ね上がり、それこそ口から出てはいけな^いものが飛び出すのではないかとすら思つたほどだ。

何か言わなければ——そう頭では思つても、情けないことに肝心の言葉の方が何一つ思い付かない。さながら酸欠の金魚のように、口だけがぱくぱくと虚しく動いている。

ミヤコはそんなボクを見て申し訳なさそうに微笑むと「驚かせちゃつてごめんね。すぐに声掛けようと思つたんだけど、二人のアツアツぶりを見たらなかなか切り出せなくて」

「あ、アツアツつてそんな……」

やっと、声が出た。よかった。このまま一生声が出なかつたらどうしようかと本気で心配しちゃつたよ、と一瞬、胸を撫で下ろしかけたが……いやいや、そんなことよりも今はこの激しく誤解された状況を何とかすることの方が先決だ。具体的にどこがどう誤解なのか、懇切丁寧に説明するのは後回しにするとして、とりあえず今はきつぱりと否定だけでもしておかないと——。

「ちよつと待つてよ。ボクたちは別にそんな関係じゃない——」

「そいつは悪いことをしたな」と聞き覚えのある声が、ボクの声を遮つた。「別に見せ付けるつもりはなかつたんだけど、どうもこいつとい^ふると、回りのことが目に入らなくてさ」

ボクは、驚いてカズキを見た。

（何を言い出すんだ、こいつは？）

啞然とするボクを尻目に、カズキは茶目つ氣たつぷりに先を續けて「まあ、それもこれも全てこいつがいけないだけだね。こいつが、あまりにも魅力的すぎるから——で、用件は何？ 谷セン（担任のあだ名だ）に言われて昨日の文化祭の出し物案でも回収しに來たの？」

「うん、まあ、そうなんだけど——」

それに対しミヤコは頷くが、視線は何故かカズキではなくボクに向けられている。加えて、何か言いたそうな、うずうずしている氣配。

嫌な、予感がした。

咄嗟にボクは何か適当なことを言つて話を逸らそうとするが——「あ」の形に口を開いたのも束の間、またしてもその目論見はカズキによって阻止される。

「そうなんだけど……何かな？」

嫌味なほど爽やかな笑顔を浮かべて、カズキがミヤコに先を促す。「気になってることがあるなら、言ってしまった方がすっきりするよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて言わせてもらうけど……それってどういう意味なのかな？」

「それとは？」

「マコピー（恥ずかしながらボクのあだ名だ）が魅力的だってこと。そこだけ聞いたらまるで恋人同士みたいじゃない……って、まさか」

まさか、二人って同性愛者なの？——とはさすがに聞かれなかった。だが、考えようによつては、そこで伏せられた方が返っていやらしく聞こえる。

顔から火が出るようなとは、正にこのことだろう。あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にさせながら、ボクは必死に弁解を試みようとするが、そこは喋りの得意なカズキのこと。会話のテンポを微妙にずらせることで、ボクが言うタイミングをことごとく邪魔してくれる。

「ご名答——と言いたところだけど、ちよつと違うかな」

「え？ どこが違うの？」

「まず第一に、オレはその手の人間じゃないってこと。

たまたま好きになったのがこいつだっただけの話さ。そして第二に、オレたちはまだ恋人同士ってわけじゃない。何故ならオレの熱烈なラブコールに対し、こいつがまだ答えを出してくれてないからね。だから正確に言えば、恋人同士（仮）ってところだな」

「そ、そうなんだ……。でもそんなこと、私なんかに話しちゃっていいの？」

「全然構わないよ。むしろ答えを急かすにはいいチャンスだ」

「いいチャンスって……（苦笑）でも、びつくりしたよ、まさか二人の関係がそんなことになってたなんて」

「……」

ボクの知る限り、カズキとそんな関係になった覚えは一度だつてないし、何よりもあのカズキとそんな関係になるなんて考えただけでも虫ずが走る。ふざけるなど叫び出したい衝動に何度駆られたか分からない。だが、その度にボクは腹に力を込めて、それが口から飛び出しそうになるのを懸命に堪える。……いや、本来ならそこは堪えるべきではないんだけど、嬉しそうに微笑んでいるミヤコの顔を見てしまうと、なかなか言うに言い出せない

い。

そうこうしているうちに、ミヤコは悪戯っぽい目でボクを見ると

「まあでも、もしかしたらマコピ―はもう答えを出して
るのかもしれないよ」

「え？」「へ？」

「その証拠に、さつきから反論が一つもでてこないじゃない。ねえ？（にっこり）」

そしてボクは、自ら墓穴を掘ったことを知ったのだった……。

＊

「さつきはひどいじゃないか」

ミヤコが立ち去ったのを見計らってボクは改めてカズキに抗議した。しかし、そこはカズキのことだ。また適当なことを言って、ボクを煙に巻こうとするに違いない……と思っていたら、予想に反してカズキは心底がっかりしたような顔でボクを見ると

「それはこっちの台詞だよ」

「へ？」

「お前には失望したね。折角人が話題を提供してやったにも関わらず、お前ときたら話をはぐらかしてばかり。一体何のためにオレが来栖にあんな話をしたと思ってるんだよ？」

「何のためにつて——ボクを陥れるため？」

「バカ。お前に興味を持ってもらうためだよ」

「あ……」

思わず、声が出た。成る程、そういうことだったのか。何だかんだ言って、カズキなりにボクのことを考えてくれてたのね、とようやく納得がいったけど……時、既に遅し。

「あ、じゃねえよ」

カズキは溜め息をついて「ったく。ホント、お前って人の努力を無駄にする奴だよな。折角オレがわざわざ道化役に徹してやったっていうのに、これじゃホントの道化じゃねえか」

「で、でもあんなやり方で興味を惹^ひかなくても……」

「バカか、お前は」

カズキはちっと舌打ちを漏らすと、苛立たしげにボクを見て「こういうことはな、手段なんて関係ないんだよ。要は相手の気を惹けるかどうかが大事なんだ」

「そ、そういうものなの？」

「そういうものなんだよ。……つたく、これだから恋愛初心者は嫌なんだ」

そして、今度は溜め息混じりに舌打ちを漏らす。どうやらカズキの機嫌が直るまで、もうしばらく時間がかかりそうだ。

「それよりさ」カズキが、ムスツとした表情のまま言った。「一つ、教えてほしいことがあるんだけど」

「ボクが答えられる内容であれば」

「いつから、来栖のことが気になりだしたんだ？」

……前言撤回。

「そ、それは……」と言い淀むボクに対し、カズキは追い打ちをかけるように

「おいおい、答えられないとは言わせないぜ。それとも何か？ お前はまだ俺のことが信用できないとでもいうのか？ わざわざお前のためにやりたくもない道化役を演じてやったにも関わらず？ そりゃあ見返りを求めるわけじゃないが、それにしたってこの扱いはあんまりじゃないか？ お前には血も涙もないのか？」

「うう……」

さすがにそこまで言われては、血も涙もある人間であ

る以上答えないわけにはいかない。

ボクは腹をくくると「分かったよ」と重い口を開いた。そう、あれは――

3

――あれは忘れもしない、二年前の入学式の日のことだ。

入学式といえば人生の節目ともいえる、重大イベントの一つである。言うなれば、人生の新たな門出。だからという訳ではないが、ボクはその時ひどく緊張していた。いつてもボクの場合、武者震いのような良い意味での緊張ではない。どちらかと言えば、大事な本番でミスを連発してしまうような悪い意味での緊張だ。もともとボクにはあがり症のケがあるようで、思い返してみれば、ここぞというイベントがある時は必ずといっていい程そんな状態に陥っていたように思う。例えば小学校の運動会でアンカーを務めたクラス対抗リレーしかり、中学校のテニス部で代表として出場した県大会しかり。結果については……まあ、言わぬが花というものだろう。後悔先に立たず。

ガチガチに固まった体を動かしていると、何だか自分がロボットにでもなったような気分になってくる。一歩、また一歩と足を踏み出す度に、ガシャン！ ガシャン！ という金属質の派手な音が今にも聞こえてくるようだ。

そうして商店街の満開の桜並木を横切ると、間もなくY**高校の建物が、続いて目指すK**高校の建物が見えてくる、というところで——不意に、後ろから声を掛けられた。

「そんなに緊張してたら、今から疲れちゃうよ」

はっと声のした方へ顔を向けると、そこには一人の少女がにこにこ笑みを浮かべながら立っていた。それを見た瞬間、ボクはまるで心臓をわし掴みされたような衝撃を覚えた。

何故って——その少女が、あまりにきれいだったから。美しい絵画や景色を前にして心打たれるのはまた違う。何て説明すればいいのか、言葉に迷うのだけど……少なくともボクの知る限り、そんな感覚に囚われるのは生まれて初めてのことだったように思う。

「君は……」

言いかけたところで、少女がまじまじとボクの顔を見つめていることに気付いた。

「な、何か？」とたじろぐボクに対し、少女は気さくな口調で「あなたもK**高の新生でしょ？」

ボクがぎこちなく頷くと、途端に少女は嬉しそうな顔をした。

「やっぱりそっか。なんか制服が新しかったから、もしやと思って声を掛けたんだけど当たって良かったわ。これでハズレてたら大恥もいとこだもんね」

「もしかして、君も新生？」

「そ。新生の割に態度がでかいなと思うでしょ？」

「い、いや、別にそうは思わないけど……」冷や汗が、背筋を伝って落ちていく。「でも、君はあまり緊張してるようには見えないね」

「そりゃあ、あなたに比べればね」

少女はボクの発言をギャグだと受け取ったのか、くすくすとおかしそうに笑った。「別にとって食われるわけでもないんだし、あなたももう少し肩の力を抜いてもいいんじゃないかな。でないと——」

「でない？」

「ひどい肩凝りになっちゃうよ」

そして、にっこりと屈託のない笑みを浮かべる。それを見た瞬間、ボクはまた胸の奥がズキンと疼くのを感じた。と同時に、自分の顔がみるみるうちに熱くなっているのがはつきりと分かる。

咄嗟に何か言わなければと口を開いたものの、こんな時に限ってうまい言葉が見付からない。

そうこうしているうちに少女は、ボクに向かってひらりと掌を振ると、元気よく声を張り上げて言った。

「それじゃあ、縁があつたらまた会いましょう！」

そして、ボクが何か言う前にくると踵を返すと、足早に去っていく。

遠ざかる彼女の後ろ姿をぼんやりと眺めながら、ボクはふと彼女と同じクラスになれたらいいな、と思った。

＊

「……で、まあ、そのコが来栖さんだったわけなんだけどね」

そう言っただけが一通り話が終わると、カズキは心底呆れ返った顔でこう言った。

「奥手にも程がある」

「奥手って——」

「話を聞く限り、そうじゃないか。まさか違うとは言わせないぜ」

「で、でも、そんなズバリ言わなくても」

「なら、こう言い直そうか。それはなんて気の長い話なのでしょう、と」

「……そっちの方がひどいじゃないか」

「ふん。お前の成長のひどさに比べたら、これでもまだマシな方さ。何で二年前から何一つ状況が変わってないんだよ？ 正直、理解に苦しむとしか言いようがない」

そう言っただけで、カズキは天を仰いだ。「おお、神よ！ この哀れな若者を救いたまえ！」

「あ、哀れって言うな」

「でも、事実が変わりはないだろ」

「……」

悔しいことに、それを指摘されると何も言い返すことができない。

そんなボクの肩を、カズキがぼんと叩いて「ま、言い過ぎたと謝る気はさらさらないが、代わりにオレがとおきのアドバイスをしてやるよ」

「とおきのおきの……アドバイス？」

「そう」カズキは頷いて「お前みたいな筋金入りの奥手人間にできる唯一無二の方法さ。いいか、耳の穴かっぽじってよく聞けよ」

そして、カズキはボクの目を真つすぐと見据えるところと言った。「告白しちやえよ、マコト」

4

その夜、ボクはなかなか寝付くことができなかった。

ベッドに潜り、目を閉じたまではいいけれど、いくら待っても眠気は一向に訪れてくれない。代わりに頭の中を支配するのは、昼間にカズキが言ったあの言葉。

『告白しちやえよ、マコト』

*

ボクは自分の耳を疑った。

今、カズキの奴は何て言った？ ボクの聞き間違えでなければ、確か告白しろだとか何とか言ったような気がしたのだが……。

「告白しちやえよ、マコト」

と、もう一度カズキは同じ口調で同じ台詞を繰り返した。「おそらくお前にとつても、それが最良の選択だと思う」

「告白って……それ、本気で言ってるの？」

呆気にとられるボクとは対照的に、カズキの顔はいたって真剣だ。まじまじとボクの顔を見ると

「本気も本気さ。そもそも小心者のお前に小細工なんてものは似合わないし、できっこないのは火を見るより明らかだ。かと言って正々堂々告白したところで成功する保証があるわけでもない。ただ、どちらがマシかと聞かれば、後者の方がまだ望みがあると思うんだよね、オレは」

「で、でも、それはあくまでカズキの推測だろう？ もしかしたら事実はあるっきり違う可能性も——」

「いいや、違わないね」カズキはきっぱりと断言した。

「知り合って二、三ヶ月とかいうならともかく、お前はかれこれもう十年以上も付き合ってるんだ。言うなれば、今までの経験が立派な証拠さ。それとも何か、お前は十年以上もオレの前では本心を隠していたとでも言うのか？」

「そんなことはないけど……」

「じゃあ決まりだな。お前はやっぱり来栖に告白すべきだ」

カズキはそう言うと、自信たっぷりに頷いてみせた。

「ま、とはいっても小心者のお前のことだ。いきなり告白しろといっても、なかなか決心がつかないだろう。そこで——俺はお前に取っておきのものを渡そうと思う」

「取っておきのもの？」

「これさ」

言って、カズキが制服のポケットから取り出したものを。それを見て、ボクは思わずぎよつとした。

（バ……バタフライナイフ!?）

さすがに刃こそ出てなかったものの、そこにあるのは凶器以外の何物でもない。ていうか、これのどこが「取っておき」なんだ！

あまりのことにボクが呆然としてみると、カズキが顔をしかめて「分かったらさっさとしまってくださいよ。誰かに見られたら厄介だからさ」

「あ……ああ」

反射的にそう答えたものの、よくよく考えたら何故自分がそんな厄介なものをしまい込まなければいけないのか、まるで意味が分からない。一瞬、このまま突き返し

てやろうかとも思ったが……早くも回りから注目を集め始めていることに気付き、慌ててカズキの言う通り、机の中にしまい込んだ。

自分のせいでもないのに感じる、この後ろめたさが何とも居心地悪い。ボクはじろりとカズキを睨むと「どういうことだよ？」と非難の声を上げた。

「ていうか、はなから厄介だって分かっているなら出すなよな、こんなもの」

「まあ、確かにいきなり何の断りもなしに取り出したことについては悪かったと思ってる。しかし、どうしてもこれをお前に受け取ってもらいたくてな」

「これを？ 何故？ どうして？」

「お前に、自信をつけてもらいたかったからさ」

言って、カズキは思わせ振りにボクを見る。「オレが何を言わんとしているか、分かるか？」

「……全然」

ていうか、これで分かったら、エスパーだ。

「要するに病は気からってやつさ」とカズキはいささか芝居がかった口調で言った。「例えば喧嘩において、小心者にナイフを持たせるとどうなると思う？」

「どうなるって……凶暴になるとか？」

「当たらずも遠からずってところだな」

カズキはニヤリと笑って「答えは自分も強くなったと錯覚する、だ。別にナイフを持ったからって何かが変わるわけでもないんだが、どうも小心者はそのへんをすぐ勘違いしてしまう。しかし、所詮錯覚しよせんと思うなかれ。それが時に思わぬ効果を齎もたらすことだってある。その証拠に、オレはその錯覚だけで不良のトップになっちまったんだからな」

「……は？」

それに対するボクの感想は、ただ一言。いきなり何を言ってるんだ？ こいつは——だった。何故そこに話が飛ぶのか、まるで意味が分からない。まあ、カズキが意味不明なことを言い出すのは今に始まったことではないけれど、こういう話の最中に言われると、何だか水を注きされたようで無性に腹が立ってくる。

そんなボクの穏やかならぬ胸中を知ってか知らずか、カズキがボクに「——いつだったか、オレが喧嘩の勝敗に体格や力の差は関係ないと言ったのを覚えてるか？」

ボクがムスッとしながらも頷くのを見て、カズキは満足そうに先を続けた。

「では逆に何が関係するのかといえば、度胸——つまり

は心構えってやつだな。要するに、自分が相手よりも強いと思ひ込むこと。そうすることで精神が肉体を凌駕する——といったら大袈裟かもしれないが、それなりの効果を得ることはできる。例えば、オレの経験から言わせてもらえば、自分から喧嘩を仕掛けてくる奴にろくな人間はいやしない。たいていが自惚れ屋か身の程知らずのどっちかだ。だから、迎え撃つこつちとしては、まず相手のイメージを変えてやる必要がある。具体的に言えば、お前よりオレの方がよっぽど強いんだぞ、というハッタリをかましてやるわけだ。まあ、オレの場合は意図的にそれをやっているわけだけど、お前のような小細工が苦手な小心者はそうはいかない。そこでさっき言った錯覚を利用するわけだ。そうすることで無意識のうちにハッタリと同じ効果を相手に与えることができるからな。すると、相手はそれまで思い込んでいたイメージが覆されることによって動揺し、隙を見せる。そこをちよちよいついてやれば——あら不思議、赤子の手を捻るみたいに、簡単に喧嘩に勝てるって寸法さ。どうだい？ システムとしては随分分かりやすいだろ？」

「分かりやすいと言えば分かりやすいけど……」

問題は、そんなにうまく事が運ぶものかということだ

ある。

「なんか、すごく釈然としない顔だな」

カズキが苦虫を噛み潰したようなボクの顔を見て、苦笑する。「だが、オレに言わせれば、所詮現実なんてそんなもんさ。複雑なように見えて意外と単純なもんなんだよ。要は、手品の種明かしと同じだね。まあ、だからこそ、オレはお前に自信がついたと錯覚してもらうためにそいつを渡したのさ。といっても必ずしも告白の成功を保証するものでもないから、せいぜいお守り程度に思ってくればいい」

「はあ……」

ボクは机の中からその『お守り』を取り出すと、しげしげと手の中で眺めてみた。『お守り』にしては、やけに物騒なお守りだが……。

カズキはそんなボクを見て、もう一度ニヤリと笑うと「まあ、くれぐれも取り扱いには注意してくれよ。そんなじよそこらのお守りと違って危険物と言えないこともないからな」

「危険物……ねえ」

だったら渡すなよ、そんなもの——と思わないでもなかったが、それについては敢えて黙っていることにした。

＊

ボクはナイトスタンドの明かりを点けると、ベッド脇に置いてあった物騒な『お守り』を何気なく手に取ってみた。小さく折り畳まれたそれを開き、刃をオレンジ色の明かりに翳^なしてみる。

——と、次の瞬間、ギラリと刃が光るのを見て、ボクは思わず『お守り』を取り落としそうになった。宝石の輝きとはまた違う、見る者の背筋を薄ら寒くするような冷たい光——。

『……たとえば喧嘩において、小心者にナイフを持たせるとどうなると思う？』

不意に、カズキの台詞が頭の中に甦る。

『……答えは自分も強くなったと錯覚する、だ。別にナイフを持ったからって何かが変わるわけでもないんだが、どうも小心者はそのへんをすぐ勘違いしてしまう』

自分はどうなのだろう。自他共に認める小心者の自分は、ナイフを持つことによって何かが変わったような気分になったりするのだろうか。

……分からなかった。変わったような気もするし変わ

らないような気もする。そんなまいち煮え切らない自分に、次第に腹が立ってくる。自分のことなのに、何一つ分らない。多分、カズキがいたらきつこう言うだろう。なんて救いようのない馬鹿なんだ、と。

（ああ、ボクもそう思う）

ボクはナイフを元通り折り畳むと、そっとベッド脇に戻した。

変わったかどうかは分からなかったが、ひどく虚しい気分にはなった。

カズキには悪いが、やっぱり自分に告白なんて大それたことはできっこない。明日学校に行ったら、これはカズキに返そう。そう思ったのだが――。

5

運命は、かくも苛酷な試練をボクに与えたいらしい。

翌日、教室にやって来たボクの顔を見るなり、カズキが

「そういえばアレ、出しといたから」

「出しといたからって何を？」

「ラブレター」

「ああ、ありがとう……って、今何て言った？」

「だからラブレター出しといたからって」

「ラ、ラブレター!？」

思わず声が裏返った。が、今はそんなことを気にしている場合ではない。どういうことだと問い詰めると

「要するに後押しさ」

カズキはいつもと変わらない飄々とした口調で言った。
「こうでもないかと奥手のお前は行動を起こさないだろう？」

「そんなことは――」

「ないと断言できるか？ 心の底から違うと否定できるのか？」

「それは――」

言葉に詰まった瞬間、負けを悟った。ボクはうなだれると「……違うんです」

「そうだろそうだろ」とカズキが言った。何だか得意げなのが微妙に癪に障る。「腐れ縁とはいえ、幼稚園時代からの付き合いなんだ。お前の性格くらい手に取るように分かってるさ」

「……」

「それと問題のラブレターだけど、安心してくれ。そん

な大それたことは書いてないから。まあ、せいぜい書いたことと言えば、何時何分何処に来てくれといった必要最低限なことくらいかな。お前がどう思ってるかは知らないが、人様のラブレターに私情を挟むのが野暮なことくらい、さすがの俺でも弁えてるさ」

「……」

ボクから言わせれば、人の許可なくラブレターを出した時点で、もう充分野暮な真似をしていると思うのだが……そこは敢えて触れないでおくべきだろうか。

「で、とりあえず、場所と時間なんだけど——」

カズキは、ちらりと腕時計に目を落とした。「時間は、今日の五時半にセッティングしておいた。今が八時半だから、ちょうどあと九時間後だな。何を言うかはその間に考えてくれればいいんじゃないかと」

……ちよ、ちよと待つ。

「それはいくらなんでも急過ぎやしないか？ 告白っていったら、今後の人生を左右するかもしれない重大イベントの一つじゃないか。それを心の準備もなしにぶっつけ本番でやれと言われても……」

「何を言ってるんだ？ お前は」

と、カズキが言った。その顔はすっかり呆れ返ってい

る。「善は急げって言うだろ？ それに、下手に目をあけるとそれだけお前が怖じけづくのは目に見えている。だから、お前には悪いけど、これは仕方のないことなさ。で、場所の方だけど——」

*

予想もしない急展開——いや、むしろカズキの性格から考えれば、これぐらいのことは予想しておいてしかるべきだったのかもしれない。

多分、針のむしろに座らされる気分というのはこういうことを言うのだろう。何とか告白の段取りみたいなものはでっちあげられたものの、胸騒ぎの方は一向に治まらなかった。それどころか時間の経過と共に、ひどくなる一方だ。

そうして、ばんばんに膨らみ切った不安とプレッシャーに心が押し潰されそうになった頃——ようやく、運命の時間がやってきた。

……辺りは、すっかり朱の中^{あか}にいた。

目に映るもの、全てが朱い。朱、朱、朱——体育館の、ところどころひび割れた漆喰の壁も、じめじめと湿った地面も、花が咲かなくなつて久しい枝垂れ桜の木も全て朱、朱、朱。その中で唯一、紺色の制服を着たボクたち二人だけがどこか浮いているように感じる。まるで、朱しかない世界に二人だけが残されてしまったように。そして、それはある意味、ボクの願望でもある。

風が吹き、頭上で木々がざわめく。

「実は今まで黙っていたけどオレ、ずっと来栖さんのことが——」

「好きだったんだ」

言葉は風の音に掻き消されることなく、確実にミヤコに届いた……と思う。

ミヤコはボクを見た。その顔に浮かんでいた戸惑いの色が、ボクの言葉を受けて徐々に困惑の色へと変わっていく。

どうして、私なの？ とその目が語っていた。何故、私じやなきや駄目なの、と。

それに対し、ボクは毅然とミヤコを見返すと、こう答える。

——君じやなきや、駄目なんだ。

するとミヤコは、そんなボクの視線に耐えかねたように俯くと、しばらくの間、黙り込んだ。

沈黙は肯定の印という人もいるけれど、ボクはそうは思わない。ミヤコの口からはつきりとした答えを聞くまで、少しも安心はできなかった。ボクのことをどう思っているのか、その場しのぎの曖昧な答えではなく、包み隠さないミヤコの本音を聞きたかった。

ボクは目を逸らすことなく、じつとミヤコの顔を見つめ続けた。しかし、そんなボクとは裏腹に、ミヤコの方はボクと目を合わせることを恐れるように、俯いたまま顔を上げようとしなない。

そうして、どれくらい経っただろうか。

やがて、ミヤコはゆっくりと顔を上げると、意を決したようにボクを見てこう言った。

「私は、マコピーのこと——」

「いい、お友達だと思ってるわ」

——オトモダチ。

その瞬間、ボクの頭の中は、いつかと同じように真っ白になった。

それはすなわち、相手の告白を退ける時に使われるお決まりの台詞。そして、ボクの告白が失敗に終わったという、決定的な証——。

その言葉に込められた意味を理解すると同時に、ボクの中で何かがガラガラと崩れていく音が聞こえた。

（どう、して……）

茫然と立ち尽くすボクに対し、ミヤコは何かを堪えるような、震える声で言う。

「ごめんね。マコピのことは、決して嫌いというわけじゃないんだよ。でもね……でもね……」

だが、そこまでが限界だった。その先はミヤコがいくら言葉を重ねようとしても言葉にならず、ただ低い鳴咽おえつとなって辺りに響き渡る。

ボクは——叫びたくなった。

何故、君が泣くのだ。泣きたいのは、むしろボクの方なのに。そんなことされたらますますボクが惨めになる

だけじゃないか……！

しかし、ボクがそれを口にしようとしても、体の方が頑なに拒む。喉元まで込み上げたところで、引き付けを起こしたように体が動かなくなる。

お願いだから泣き止んでくれ。これ以上ボクを苦しめないでくれ。しかし、いくらボクがそう強く願ったところで、ミヤコは一向に泣くのを止めてくれない。ボクの想いは決してミヤコには届かない。そのことはたった今、嫌と言う程思い知らされたばかりじゃないか。

どうしたら、ミヤコは泣くのを止めてくれるだろう。

どうしたら、この惨めな気分から解放されるだろう。

ボクは考えに考えて……そうして今更ながら例の『お守り』をポケットの中で未だ握りしめたままであることに気付いた。

*

校門を横切ろうとしたところで「おい、待てよ」と後ろから声を掛けられた。振り返ると、そこにはカズキが立っている。

「何か用——」言いかけたボクに対し、カズキはムツと

したように口を尖らせると「今、お前オレを無視しようとしただろ？」

「無視……？」

「お前が出てくるのを、ずっとここで待ってたんだよ。なのにお前ときたら、オレの前を何食わぬ顔で通り過ぎようとしやがって……」

「……ああ。ごめん、気付かなかった」

……本当に、気付かなかった。何だか目に映るもの全てが現実感を欠いて見える。

「つたく。どこに目を付けて歩いてるんだか」

カズキはそう悪態をついた後、一転して好奇心いっぱいの視線をボクに向けると

「……で、どうだったんだ、結果は？」

「どうだったって、何が？」

「決まってるだろ。告白の結果だよ、告白の結果。成功したのか？ それとも失敗したのか？」

「それは……」

……何故、お前に教えないといけないのだ？

頭の中で、もう一人のボクの声がする。

……お前には関係のないことだろう？ そんなこと。

「……どうでもいいだろ。そんなことは」

ボクがぶつきらぼうに言うと、途端にカズキの顔が鼻白んだ。ちえっと舌打ちして「なんかつれないなあ。オレとお前の仲だろう？」

「……」

「それに、善意の押し付けをするわけじゃないが、誰がお膳立てしてやったと思ってるんだよ？ せめてそれぐらいは教えてくれてもバチは当たらないんじゃないか」（それぐらいって……）

「そんなこと……」

……そんなこと、ボクは一言も頼んだ覚えはない。全部、お前が勝手にやったことじゃないか。それなのに、お前は見返りを求めたりするのか。しかもそのおかげで、ボクは、ボクは……

「……なあ、カズキ」

ボクはカズキに話し掛けた。カズキが、期待のこもつ

た目でボクを見る。

「お、遂に話す気になってくれたか」

「まあ、ね。これだけ言われたら話さないわけにはいかないよ。ただし——」

ボクは、内心の煮えたぎるような感情を押し殺しながら言った。「悪いんだけど、場所を変えてもらえないかな。さすがにここだと、誰かに聞かれなくても限らないしね」

＊

その夜も、ボクはなかなか寝付くことができなかった。しかし、寝付けない理由は昨日とはまるで違う。

目を閉じると瞼の裏に甦るのは、結果を教えた時の、カズキのやつぱりなという顔。そして——嗚咽に声を詰まらせながらボクに謝る、ミヤコの姿。

『ごめんね。マコピーのことは、決して嫌いというわけじゃないんだよ。でもね……でもね……』

その声は今なお耳の奥でこだまし、ボクの心を苛み続ける。

頼むから、もう泣くのを止めてくれ。これ以上、ボク

を苦しめるのはやめてくれ。頼むから、頼むから……。

……

気が付くと、ボクは子供のように泣きじやくつていた

――。

8

結局、一睡もできないまま、ボクは朝を迎えた。

窓から差し込む、柔らかな日差し。どこからともなく聞こえてくる雀の声……ボクの気持ちとは関係なく、いつも通り夜が明けると朝が来る。それがたまたまなく不思議であると同時に、ひどく恨めしかった。

枕元の目覚まし時計を見ると、針はびったり午前七時を示している。

そろそろ学校に行かなければと半身を起こしかけたところで、ようやくボクは今日が第二土曜日であることに気付いた。再びベッドに身を預けようかとも思ったが、横になったら最後、今日一日起きれないような気がする。それくらい、全身が重く、だるい。しばらく悩んだ末、ボクは起きることを選んだ。

何だか、胸にぼつかりと穴が開いたようだった。あら

ゆる感情が胸の内に留まることなく、そこから流れ出ていく。どうしようもない虚脱感。

窓際に立つと、ボクは中途半端に窓を覆っていたカーテンを引き開けた。いつもなら、そこには様々な色が溢れた光に満ちた世界があるはずだった。しかし今は——どこを見てもそんなものは、ない。くすんでいる。目に映るもの全てが色を失い、ただただ褪せて見える。

それは多分、今のボクの心象風景なのだろうと思った。あの時、あの瞬間を境に、ボクの中で世界は終わってしまったのだ。そして、その世界を終わらせたのは紛れもないミヤコの、あの言葉。

『私は、マコピーのこと——いい、お友達だと思ってるわ』

オトモダチ。オトモダチ。オトモダチ。オトモダチオトモダチオトモダチオトモダチ……

ボクは急いでカーテンを閉めると、再び後ろにあるベツドに体を投げ出した。

もう二度と起きなくてもいい。そう思うくらい、ひどい眩暈がした。

*

その日の夕方、珍しくボクに来客があった。

狼狽した母親に連れられてボクの部屋にやって来たのは、背広に身を包んだ二人組の男だった。ただの営業マンにしてはきな臭い匂いを纏った男たちは、まず自分たちが刑事であることを明かすと、ボクに現在ある事件について捜査しているところなのだと説明した。

「ある事件……？」

「昨夜遅く、K*＊高校の体育館裏で女子生徒の一人が何者かに刺し殺されているのが見付かってね」と、刑事の一人が努めて落ち着いた口調で言った。「二年B組の■ ■ ■さん。勿論、知ってるよね？」

「ええ。同じクラスメイトでしたから」

「あまり、驚いてないみたいだね？」

「え？ ……あ、いえ、そういうわけじゃないんですが、その、あまりに現実離れし過ぎてびんとこないというか、いまいち、実感みたいなものが湧いてこなくて……」

……それは嘘だ。

また、頭の中でもう一人のボクの声がする。

……そんなこと、微塵も感じてないくせによく言うよ。

「すみません。こんな薄情な性格で」とボクが頭を下げると、刑事は逆に恐縮したようだった。「いやいや」と首を振って「謝るべきなのはむしろこっちの方だ。確かに我々のような警察官ならいざ知らず、一般人に過ぎない君の立場からすれば、それも致し方ないことだからね。軽率な発言をしてしまったようで、申し訳ない」

「いえ……それより刑事さん、ボクに何をお聞きになりたいんですか？」

「え？ ……ああ、実はその現場から、凶器と思われる血の付いたバタフライナイフも一緒に見付かったんだが、どういうわけか聞き込みをしたクラスメイトの何人かが、君がそのナイフを手に行っているのを見たと言っていてね。もし心当たりがあるようならどうか、話を聞かせてもらえないかな」

それを聞いてボクは、ああ、そういうことかと腑に落ちると同時に、やはり見られていたかと思ったが、不思議とそのことを悔やむ気にはなれなかった。むしろ、今問題なのはそんなことではなく――

「……そのことでしたら刑事さん、お話しすることなん

て何ありませんよ」

くらくらくと、次第に激しさを増す眩暈に吐き気を堪えながら、ボクはやつとの思いでそう言った。

今や、色のない世界は飴細工のようにぐにぐにやと歪んで見えた。机や椅子は勿論のこと、部屋の中に存在する何もかもがグロテスクなモニュメントみたいになっている。特に、刑事たちの顔なんかはおかしなくらい歪みきって、何だかムンクの叫びのようだ。

その刑事たちの顔が、今度は一転して徐々にぼやけていく。いや、刑事たちの顔だけではない。気が付けば、目に映るものが全てが朧おぼろげに霞んで見える。どうしたんだろうと思ひ、何気なく目許に手をやったところで、ボクはようやく事情を理解した。何のことはない。ボクは無意識のうちに泣いていたのだ。それは、今更ながら自分がしかしたことの重大さに気付いて慄然としたためか、それとも失恋のショックが未だ尾を引いているのか……どちらにしろ、情けないことに変わりない。

ボクは上着の袖で涙を拭くと「それは、どういう意味かな」と問いかけてくる刑事に対し、こう答えた。

「どういう意味も何も、多分、刑事さんが思っていることと同じですから」

「……つまり君は」ボクが言わんとしていることによく気付いたのか、刑事の声に驚きの感情が広がっていく。「被害者を殺したのは自分だと、そう言いたいのかな」

「ええ。そう受け取っていただいて構いません」

そう、ボクがきつぱりと言った次の瞬間だった。ドアの向こうで、泣き声とも悲鳴ともつかない声が聞こえた——と同時に、今まで事の成り行きを見守っていたもう一人の刑事が、慌てたように部屋を飛び出していく。

部屋に残った方の刑事がボクに向かって何か言っているようだったが、もはや何も耳に入らなかった。

相変わらず、ひどい眩暈がする。ぐにやぐにやと歪んだ、色のない世界。吐き気だって未だ治まっていない。けれど……さつきよりも少しだけ、楽になったような気がした。

9

【一〇月二一日日曜日M**新聞朝刊社会面より抜粋】

一九日夕方、埼玉県O**市にある私立K**高等学校

校の体育館裏で、同校二年生の七瀬一樹（ななせ・かずき）さん（一七）が何者かに殺害された事件で、埼玉県警O**署は二〇日午後三時頃、七瀬さんと同じクラスメイトの女子生徒（一七）を重要参考人として任意同行した。

取り調べに対し女子生徒は七瀬さんを殺害したことを大筋で認める供述をしており、同署では引き続き女子生徒から七瀬さんを殺害した詳しい動機について聞いていくと共に、女子生徒と七瀬さんの間に最近何かトラブルがなかったか、関係者から事情を聞いている。

エアミス研同人誌『非实在探偵小説研究会 ～AIRMYS～』投稿について

エアミス研の有志で同人誌を作ることになりました。参加資格は、エアミス研のメンバーであることのみ！

同人誌で募集する原稿の内容は、ミステリに関係するモノ、エアミス研に関係あるものなら何でもアリです。書評、創作、パロディ、イラスト、マンガ、レポート、なんでも OK です。

参加したいな、と興味を持たれた方は 以下のサイトに詳細情報、原稿の投稿要領等がありますのでご確認ください。

<http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>

<今後の活動予定>

2011 年 6 月 12 日(日) 第十二回文学フリマ (大田区産業プラザ PiO)

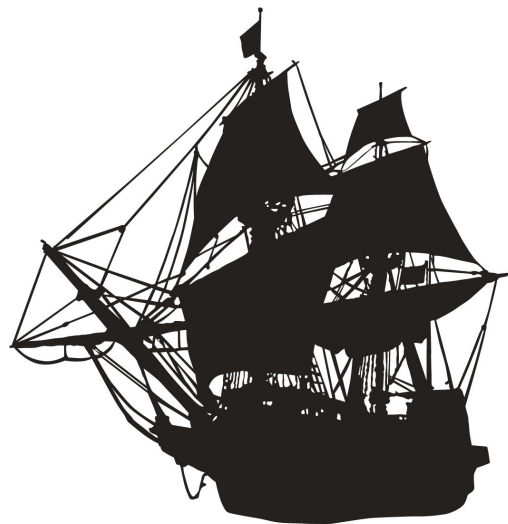
非实在探偵小説研究会 ～AIRMYS～1号 発行予定

2011 年 8 月 12 日～14 日 コミックマーケット 80 (東京ビッグサイト)

当落結果待ち。新刊予定なし。

以降、文学フリマ、コミケ中心にイベント参加予定。

同人誌通販も対応します。詳細は、上記のエアミス研同人誌案内サイトで通知していきます。



以上、2011 年 2 月時点の情報です。

編集後記

【深川 拓】@tuckukagawa

大昔に商業媒体で発表した作品の番外篇です。寄稿に際して全面的に改稿したかったのですが、時間に余裕がなく、旧稿のままとなってしまいました……本番では完全新作で行こうと思います、『メイド探偵』の。

【紫藤 陽花】@Azisais

はじめまして、あじさいです。それっぽい名前です。それっぽいものを書いていました。ツイッターの集まりが、まさかこんなことになるとは。ともあれ、制作に関わってくださった皆さん、そして手にとってくださいました皆さん、本当にありがとうございます。あと、誰か職をください。

【二丁】@neru_akimbo

構想三十分、執筆二日。自分にしてはびっくりする早さで仕上がりました。長編もこの調子で書けると良いのだけれど、会誌の話が持ち上がる前日に書き終わっていたので、結果的にほとんど何もしてない人になってしまいました、申し訳ない。一号にも寄稿させていただく予定でいます。

【麻里邑 圭人】@mysteryEQ

開けてびっくり玉手箱 うわっふー

【タイガー田中】@amuchan01

今回、自分の体験を振り返ってエアミス研について書いてみましたが、予想外に書ききれないことが多いことに気づきました。「納得いかん！」と反論ある方は、是非次の号にて筆を手に取っていただきたい所存。

【方功 鉄文】@s.a.m.666

掲載作は、この零号にも書かれておられる、紫藤陽花氏がWEB上で発表された掌編作からの影響を受けています。拝読時に思いついた別解ネタをベースに書き始めました。最終的に当該部分は、主眼では無くなりましたが、氏の作が無ければこの作品は存在していません。感謝を最大限に示したいと思います。

【ウスタ アヤ】@usuna.ay

ミステリ書けないけど参加したい一心で、表紙を描かせて頂きました。どんな絵にしようかと悩んだ時、会議のあるリクエストを思い出しました。ジャケ買い必至の飛鳥部氏の某作……静寂に秘めたイノセンスと妖美！ふともも……あゝ！そしてぶかさんはじめ参加者の皆様の御尽力に感謝いたします。みんな凄い！

【ぶかさん】@Pukasan

言いだしっぺの発起人です（笑）編集作業を担当しました。同人誌を作る作業自体十年ぶりでしたが、皆さんの協力もあり何とか形にできました。次号からは、当面PDF版は作らず冊子のみ発行となる予定です。即売会参加も視野に入れて活動していきますので、末永くお付き合い頂ければ幸いです。





非実在探偵小説研究会 ～AIRMYS～ 零號

発行日 2011 年 2 月 10 日 初版
2011 年 2 月 25 日 第二版
発行 エアミステリ研究会
連絡先 Pukasan (Twitter)
URL <http://www43.atwiki.jp/airmys-dj/>

Special Thanks

編集作業のお手伝いをして下さったエアミス研有志のメンバー

© 2011 エアミステリ研究会 作品の著作権は各著作者に帰属しています.

